☆帝国主義国、後進国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独—世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

3月20日
5日、20日発行
第343号
編集発行人　鹿島　昴
一部　50円
購読料20回1,200円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都新宿区番衆町10の8
コーポハピービルE1号
電話 03（356）2982
振替東京26110

今号の内容
1面　2・23春闘集会圧倒的に成功
2面）共産主義的主体を確立し、
3面）人民に奉仕する党風をさちとれ
4面　足立分派のカクマル主義を許すな

労共闘総決起集会の圧倒的成果に踏え

全国から3・22狭山決戦へ

3・17本山、3・22狭山を勝ち取り今春期決戦へ総進撃せよ

全国の労働者学生の皆さん！

資源の高騰を契機とした帝国主義間対立の激化の渦中、田中（帝国主義）政府は円ブロック圏の形成と資源確保をめざして、アジア侵略反革命に積極的に乗り出した。

しかしながら、タイ、インドネシア、「韓」国人民をはじめとしたアジア人民の反日闘争の高揚、七四春闘におけるインフレと生活破壊に抗し決起している青年労働者の闘い、そして狭山闘争を頂点的闘いとした部落解放闘争の高揚は、田中（帝国主義）政府をして、自らの帝国主義支配体制を大きく動揺させ、破局的危機に追い込まんとしている。

われわれは七四春闘をまさに国内外の被抑圧民族、人民と連帯し、日帝のアジア侵略反革命粉砕！田中（帝国主義）政府を追撃し打倒する闘いとして、勝ち取らなければならない。

日帝のアジア侵略反革命強化と「韓」国朴政権の危機

昨年十月第四次中東戦争の勃発を契機としたアラブ産油国の石油供給削減は、各国経済ブロック圏の形成、資源確保をめぐって、帝国主義間競争、対立をより一層激化させている。

とりわけ、戦後、米帝国主義のドル援助を背景に、安価な資源輸入と豊富な労働力により、重化学工業を中心とした生産財部門投資を行うことにより、国民総生産世界第二位の地位を築きあげてきた日本帝国主義は、生産財部門への設備投資によって形成してきた産業構造そのものの破局的危機を迎えており、その危機の乗り切りを国内における産業の再編成と、海外投資による円ブロック圏の形成と資源確保により為さんとしている。

かかる日帝ブルジョアジーの自らの死活を賭けたアジア侵略反革命の強権的遂行は、国内外の被抑圧人民の一大反撃を受け、帝国主義支配体制そのものの破局的危機をますます深化させている。

とりわけ、昨年秋、金大中氏の拉致事件を契機とした「韓」国学生、知識人の反朴反日闘争の高揚は、日帝田中－朴反革命軍事政権を大きく動揺させ、現在「韓」国では朴独裁政権の下、あらゆる政治活動の禁止、朴政権に対する批判さえ許さないという反革命的弾圧の嵐が吹き荒れている。

昨年末、憲法改正請願運動本部が設置され、「民主体制復活」「憲法改正」「対日経済隷属化反対」「「韓」国中央情報部解体」のスローガンの下、百万人署名が開始された。

この公然たる反朴反日闘争に対し、朴は恫喝を繰り返したのであるが、「いかなる圧力にも屈せず、署名運動を引き続き進める」との宣言が為され、今年一月四日署名三十万、更に七日には四十万に達した。

まさに自らの支配体制を大きくゆすぶられた朴政権は、一月八日午後五時をもって憲法改正運動とその報道の全面禁止を骨子とした大統領緊急措置を発動し、違反者に対しては令状なしで逮捕、拘束できる権限を警察に与え、十五年以下の懲役を科するという全くの暴力支配に乗り出したのである。

かかる朴の強権発動に一切屈する事なく、あの一九一九年三・一独立万才革命から四・一九蜂起の革命的伝統に打ち鍛えられた「韓」国人民は、公然と朴政権の批判を行い、一月十七日三十人の牧師は、「一・八緊急措置の撤回」「民主体制復活」の宣言文を朴につきつけた。

かかる事態に対し、朴は一月十五日憲法改正運動の最高指導者張俊河氏等二人を逮捕し、一月二十一日宣言を明らかにした牧師十一人を逮捕、一月二十六日には延世大学生高永夏君ら七人を拘束し、何とか自己の延命を画策している。

このような朴反革命軍事政権の「韓」国人民に対する暴力的支配を背後から支えているのが、六五年日「韓」条約締結以降、「韓」国への侵略反革命を強化してきた日帝であり、両者はますます結合を深め、「韓」国における自己の権益擁護と南北朝鮮半島の分断の固定化としての、日「韓」共同の反革命軍事拠点の打ち固めを画策しているのである。

とりわけ、七十年代に突入して以降、米帝のアジアからの後退、在「韓」米軍の削減以降、日帝は「韓」国への本格的な資本投下を開始し、最大の資本輸出国にのしあがってきている。

日帝田中は、一月二十九日、日「韓」大陸ダナ協定に調印し、東シナ海大陸ダナの石油資源確保に乗り出さんとしており、「韓」国人民への犠牲抑圧の強化を一切顧みる事なく、資源確保、権益確保に血眼になっているのだ。

そうであるが故に、帝国主義足下の労働者人民の七四春闘における国際主義的任務は、反日闘争を自らの生命を賭し、如何なる弾圧にも屈する事なく闘い抜いているタイ、インドネシア、「韓」国人民をはじめとしたアジア人民との熱い連帯結合を克ち取る事であり、その為に、われわれは七四春闘を日帝のアジア侵略反革命粉砕！田中（帝国主義）政府打倒の闘いとして貫徹しぬくのでなければならない。

社共を軸とした既成労働運動指導部が国内本工労働者の利益のみを防衛する事に奔走し、日帝田中のアジア侵略反革命に向けての国内侵略反革命体制構築とは一切対決しえず、まさに戦闘的青年労働者の革命性を眠り込まさんとしている現在、われわれの国際主義的任務は一層重大である。

三・一七本山現地闘争、三・二二狭山公判闘争に総結集せよ

今、まさに日帝田中は昨年十二月末日「韓」閣僚会議、今年一月七日東南アジア訪問を通して、本格的にアジア侵略反革命に乗り出したのであり、国内においては侵略反革命体制を構築すべく、今年度防衛予算を一兆九百三十億円とし、自衛隊の実戦部隊化をめざし、ミサイル開発、基地整備にのりだしている。

そして又、国内労働者人民に対しては悪性インフレと物価の高騰による生活破壊、とりわけ臨時工、社外工、部落民、沖縄人民、在日朝鮮人民、「障害者」等の被抑圧人民に対して、矛盾のしわよせ、犠牲を強要し、差別・分断支配のより一層の強化をもって国内侵略反革命体制の構築を目論んでいる。

この悪性インフレは、労働者人民への生活破壊をますます進行させる一方、昨年九月期決算における日帝ブルジョアジーの企業利潤が、前年同月比、繊維工業七・三倍、石油精製業四・四倍、鉄鋼業三・五倍、製紙パルプ業三・五倍である事をみても明らかなように、独占企業は増々利潤を拡大し、私服を肥やしているのである。

又、生産制限に基づく産業の再編成は、①生産財部門への投資抑制と非生産財部門、とりわけ軍事部門への投資の拡大②アジア・アラブ諸国への海外投資の拡大という日帝の動向に規定されてドラスチックに進行している。

この各企業の生産制限、産業構造の一大転換の中で、独占資本がますます私腹を肥やす一方、中小企業の倒産は相い継ぎ、昨年十二月の中小企業の倒産は九百件を超し、農村からの出稼ぎ労働者、日雇労働者、臨時工、社外工の賃金カット、切り捨て、操業短縮等、最下層労働者に対して一切の矛盾が集中している。

以上の如く、資源の高騰を契機とした帝国主義間対立の激化の中で、帝国主義間競争に打ち勝つ唯一の道であるアジア侵略反革命—円ブロック圏の形成、資源確保を策動する日帝田中は、一切の矛盾の転嫁を国内外の被抑圧人民に為さんとしているのであり、かかる日帝田中のアジア侵略反革命強化に抗した、国内外被抑圧人民の闘いは、まさに非和解的に爆発せんとしている。このような七四春闘の爆発的高揚を前にして、総評・同盟・中立労連・新産別等の労働四団体は、青年労働者の下部からのつき上げにより一定の戦闘的ポーズを示さざるを得ず、「国民春闘」としてインフレ反対、生活防衛をかかげ、四月中旬の決戦を「連続ゼネストも辞さず闘い抜く」としている。

しかし、社共を軸とした既成労働運動指導部は、七四春闘の目標を六月参院選にしぼっており、「民主連合政府」の幻想を労働者人民に与え、全ての矛盾の解決を議会による「話し合い」で解決せんとする全くの議会主義に陥ちこみ、七四春闘を帝国主義支配体制内における改良の積み重ねとしてしか、闘おうとしていないのだ。

かかる社共の改良主義、議会主義は、七四春闘においても、ゼネストをちらつかせ、トップ会談に

〔四面へ〕

2・23春闘総決起集会に、全国の革命的労働者四〇〇名決起

全国の戦闘的・革命的労働者の皆さん！

春闘勝利！二・二三全国労共闘春闘総決起集会は、全国各地から革命的労働者四百余名を結集して、圧倒的成功のうちに勝ち取られました。

会場の幡ケ谷区民会館に各地から結集してきた蜂起・プロ独派の戦闘的労働者は、会場を埋め尽し、二・二三集会の大成功をもって七四春闘の勝利を勝ち取ることを固く決意したのです。

この集会には、首都圏、関西をはじめとして全国から戦闘的労働者が各職場、生産点での闘いの成果をもって集り、七四春闘を議会主義、改良主義的に歪曲しようとしている社共を粉砕し、革命的労働運動の圧倒的貫徹をもって、七四春闘に絶対に勝利していくことが確認されていったのです。

まさに、社共人民戦線派が七四春闘の大爆発を恐れ、それを改良主義・議会内での闘いに陥しこめようとしている中で、四百余名の戦闘的労働者を結集して打ち抜かれた二・二三集会は、七四春闘勝利の方向を明確に指し示していったのです。

全国の労働者の皆さん！

日帝＝田中政府のもとでのインフレの進行・物価騰貴は、労働者、農民の生活を極端に圧迫し、生存すらをもおびやかされる事態に至っています。

日帝によるこのような人民抑圧・強収奪と対決し、打ち破る闘いは、決して社共などのいう「三万円の賃上げ」等の中にはありません。

それは、日帝の侵略反革命を阻止し、人民の分断、支配と対決する闘いの中に、はじめて実現されるのです。

そのような内容を持った革命的労働運動の圧倒的推進が現在、戦闘的労働者に問われており、必須の課題としてあるのです。

全国の革命的労働者は、二・二三集会の大成功をもって、日帝＝田中政府打倒へと驀進しなければなりません。

社共の議会主義を粉砕し、革命的労働運動の推進を決意

二・二三春闘集会は、何よりもまず、戦後最高の物価高騰、悪性インフレの進行による労働者大衆の生活の破壊の中で、総評をはじめとする労働四団体、社共既成左翼が、七四春闘を三万円の賃上げや民主的政策の要求に解消し、春闘の大爆発を押えんとしている中で打ち抜かれたものです。

田中政府は、昨年の「石油危機」を契機とする物価高騰、インフレの進行の中で、その矛盾を労働者人民、被抑圧人民に転嫁し、人民抑圧を一層強めています。それは、総需要抑制の名のもとでの節約の強制や、生産縮少による臨時工、社外工の賃金カット、首切りなどに端的に示されています。

そして日帝は、労働者大衆へ犠牲を押しつけ、生活破壊を行うとともに、他方ではアジアへの侵略反革命を着々と遂行しているのです。日帝の人民抑圧、生活破壊は侵略反革命と不可分であり、共に日帝延命の道としてあるのです。

社共などの既成左翼は、このことに全く無自覚であり、もっぱら七四春闘において三万円の賃上げ、七万円の最低賃金の保証等の改良主義的要求を労働者の任務としているのですが、これは排外主義へと労働者を動員することに他ならないのです。

日帝の侵略反革命の遂行に目をつぶり、経済主義的課題の実現のみを追求する社共は、まさに日帝の左翼的補完物になり下ったのです。

それのみならず、社共既成指導部は、七四春闘の革命的爆発を恐れ、必死となって押えこもうとしているのです。

二・二三春闘集会は、このような情勢の中で、日帝の侵略反革命と対決し、人民抑圧と対決する革命的労働運動の展開をもって、七四春闘の大爆発を実現するものとして断固勝ち取られていったのです。

全金本山の労働者からの挨拶を受け連帯を固める

集会は六時半より開始され、最初に全都筑波共闘から連帯の挨拶がなされました。

筑波共闘からは「現在、大学の帝国主義的再編が筑波体制としてかけられてきており、それとの対決を各大学で展開している。この攻撃は、日帝の侵略反革命に向けた大学の再編としてあるが、これは労働者にかけられてきている生活破壊等の攻撃と同じものとしており、筑波共闘は戦闘的労働者との労学連帯のもと、筑波体制粉砕－日帝打倒を闘い抜いてゆく」との決意表明がなされました。

続いて、三年間にもわたり本山資本、ガードマン、第二組合、機動隊との非妥協的闘いを勝利的に貫徹している本山労働者の闘いの映画が上映されました。映画は昨年秋－春の勝利的ロックアウト粉砕、原職奪還の全国支援闘争の一大局面を記録したもので、本山労働者の、本山資本・暴力ガードマンを排除しての実力就労闘争の展開場面には「意義なし！」の声が巻き起り、集会に参加した労働者は、本山の労働者の闘いをわがものとすべく、熱心に映画に見入っていきました。

映画の後、本山労働者より本山闘争の経過と戦闘的実力闘争を闘いとってきた内実の説明と三月闘争への決起が訴えられました。集会に結集した全ての労働者はこの訴えに圧倒的連帯を示し、全国支援闘争への結集をはっきりと決意していきました。

戸村一作委員長からも連帯の挨拶

本山労働者の挨拶に続いて、戸村一作三里塚芝山連合空港反対同盟委員長より発言がありました。

戸村氏はその発言の中で、「先程の本山労働者の闘いとその報告にもあったように、社共は決定的局面になると逃亡する。三里塚農民は自らの闘いの中で議会主義の欺瞞性を認識してきた。われわれは三里塚の闘いの基本である大衆的実力闘争路線を断固堅持しなければならない。革命が起るためには、労働者・農民が結合しなければならない。ロシアでもそうだった。今が結合しなければならないときだ。」と明確に述べられ、労・農・学の革命的団結を訴えました。

このアピールに対しても全員「異議なし！」で圧倒的に応え、三里塚、本山等を貫く労働者・農民の固い団結の強化を確認していきました。

日帝＝田中政府の人民抑圧と対決し、七四春闘の爆発を

次に全国労共闘の代表から基調報告がなされました。代表は「石油危機を契機に、日帝は東南アジアに対する侵略反革命の策動を一層強化している。本年一月初めの田中の東南アジア訪問はそのようなものとしてあり、インドネシアの液化天然ガス（LNG）の収奪と東南アジア人民の抑圧を意図したものなのだ。しかしながら日帝のこのような策動は、アジア人民の反撃に会い、手痛い打撃を与えられている。タイ・インドネシア人民による反日帝闘争の大昂揚がそれである。しかし日帝は侵略反革命の野望をあきらめず、矛盾を国内外の人民に転嫁しながら強権的に遂行せんとしている。それは戦後最高の物価上昇をもっての収奪の強化と、社外工・臨時工などの整理、首切り等である。日帝のこのような侵略反革命と対決し、人民抑圧と対決する革命的労働運動の展開が今ほど労働者に問われている時はない。日本の革命的労働者は、議会主義、改良主義にのめりこむ社共を粉砕し、七四春闘の大爆発をもって日帝田中政府打倒を闘い抜いていかねばならない」と、七四春闘における革命的労働者の任務を明らかにし、ベトナム・インドシナ人民、タイ、インドネシア、「韓」国人民の英雄的闘いと連帯した国際主義的闘いを日本でも展開していかねばならないことが訴えられました。

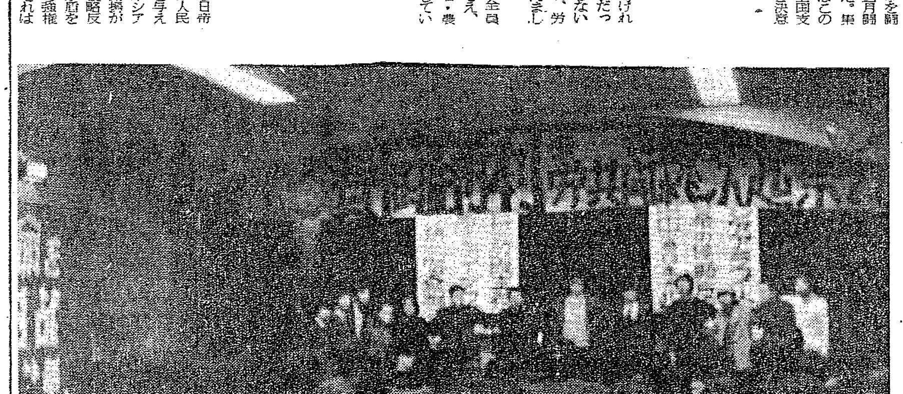
この力強いアピール、明確な闘いの方向の提起は、この集会に参加した全労働者に圧倒的に確認され、革命的労働運動をもって七四春闘勝利の地平を切り拓いていくことが意思統一されました。

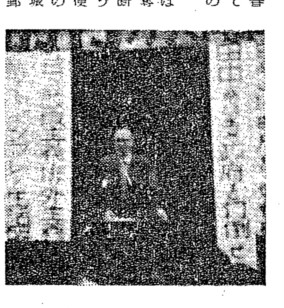
この基調報告にもあったように、現在、社共人民戦線派がインフレ手当要求や民主的政策要求にのめりこみ、労働者人民を排外主義に動員せんとしていますが、戦闘的労働者はこのような傾向と闘い、日帝の侵略反革命粉砕－日帝打倒の中に自己の進む道を見出さねばならないのです。これこそが唯一プロレタ国際主義の内実を持った闘いであり、日本労働者人民の闘いの方向なのです。

次いで、集会は、この一年間各職場－地域において革命的労働運動の実践的展開を貫徹し、七四春闘勝利の戦陣を着々と打ち固めている全国各地の闘う労働者からの決意表明を受けていきました。

兵庫県の自治体労働者からは「人勧体制実力打破・スト権奪還、帝国主義の腐朽性・差別分断と闘う」を基軸に七四春闘を闘うとの決意が表明され、愛知の郵便労働者からは不当解雇粉砕闘争の報告がなされました。続いて茨城の労働者、病院労働者、埼玉の郵便労働者、鳥取の労働者から各職場の闘いの報告があり、革命的労働運動の物質化に向け各地で闘い抜いていることが明らかにされました。

更に、芝浦屠場労働者、一・二九実委、全軍労働者の発言があり、「アジアアラブ人民と連帯し日帝の侵略反革命粉砕！田中帝国主義政府を打倒せよ！社共の改良主義・排外主義を許さず、インフレと生活破壊に抗し、七四春闘に勝利せよ！」のスローガンを採択し、圧倒的成功のもとに集会を終えていきました。


春闘勝利を決意する400余名の戦闘的労働者


連帯の挨拶をする
戸村一作氏

二・二三集会の革命的意義を更に打ち固めよ！

二・二三全国労共闘春闘総決起集会は、全国各地から四百余名を結集して打ち抜かれました。最初にこの意義を確認しなければなりません。

それは、社共人民戦線派が改良主義、議会主義へとのめりこむ中で、戦闘的労働者の圧倒的結集を勝ち取ることにより、革命的労働運動の地平を打ち固めたことです。

七四春闘が三万円賃上げ、政策転換を要求する社共等既成左翼の指導下で闘われようとしている時、戦闘的労働者の総結集をもって革命的労働運動の全国的展開を固く意志統一していったのです。

このことは、革命的左翼と呼ばれている部分すらもが七四春闘の明確な方針を提起できず、混迷している中で、唯一わが蜂起－プロ独派の労働者が春闘の闘いの方向を提起し、そのもとに闘うことを全労働者に明らかにしていったものなのです。

そして第二には、この集会において七四春闘の明確な闘いの方向とその実現に向けての固い意思統一を勝ち取ったことです。

それは、アジア・アラブ人民と連帯する国際主義的内実を持ち、日帝の侵略反革命を粉砕するものとして七四春闘が闘われねばならないこと、社共の改良主義、排外主義と断固対決し、実力闘争を貫徹しなければならないことが確認されていったことです。

この明確な七四春闘の方針こそ日本の労働者人民に問われている階級的責務であり、排外主義ときっぱりと訣別するものとしてあるのです。

世界的通貨危機と資源不足－スタグフレーション（インフレ下の物価上昇）の中で、日帝は独自の侵略反革命を海外投資増大、円経済圏の確立を通じた市場確保として強力に遂行しようとしています。日帝のこのような策動は、タイへの経済進出に典型的に見られるように、現地資本の吸収をもたらすと共に労働者人民を日帝に隷属化させるものとしてあり、人民への抑圧・敵対を強めるものなのです。

今年の田中の東南アジア訪問の際、田中に直接向けられたタイ・インドネシア人民の怒りは、そのことをはっきりと示しています。

東南アジア人民に向けられた牙は、国内では労働者人民に向けられ、容赦のない攻撃が加えられています。

それは、昨年秋以来の「石油危機」を口実とした三〇%にも及ばんとする物価の上昇であり、生産縮小の中で社外工・臨時工の賃金カット、首切りが進行していることです。

石油会社各社は、「石油危機」を千載一遇の機会として大幅な石油の値上げを強行し、この恐るべき手口で史上まれに見る利益をあげています。他の企業も、石油に続けとばかり便乗値上げを行い、そのため消費者物価は二十五%以上も上昇し、労働者人民の経済生活は根底的に危機に押しやられています。

それのみならず、各企業では生産縮小を口実に人員整理がはじまり、社外工・臨時工の首切りが進行し、合理化が進んでいるのです。

このように、労働者人民の生活破壊・合理化の嵐が吹き荒れる中で七四春闘は闘われようとしているのです。

この春闘において、社共は、「物価の大幅上昇により昨年の賃上げは消えてしまった。従って生活防衛のためにも大幅賃上げを勝ち取らなければならない」として、三万円の賃上げ、七万円の最低賃金制等の実現を目的としていますが、社共のそのような闘いは全く誤ったものなのです。なぜならば、そのような闘いは日帝の侵略反革命の遂行に全く対決することがないからです。社共の大幅賃上げ、民主的制度要求の闘いは、日帝の侵略反革命の枠内の闘いであり、その違いと言えば、せいぜい田中＝自民党がやるか社共がやるかの違いでしかないのです。

そのような闘いを行おうとする社共は、全く反動的です。

日本の戦闘的労働者の闘いは決してそのような闘いであってはなりません。それは、日帝の侵略反革命と対決し、人民の差別・分断攻撃を粉砕するものとして闘われねばならないのです。そのような内実をもった革命的労働運動の構築と、各職場・生産点での圧倒的推進が日本の労働者の任務であるのであり、この展開を通じてはじめてベトナム・インドシナ人民との革命的連帯が勝ち取れるのです。

全国の労働者の皆さん！

七四春闘の第一歩は三・一ゼネストとして既に勝ち取られています。わたしたちは二・二三集会の意義をはっきりと確認し、更に大胆に闘争を展開し、闘いの前進を恐れる政府、社共、ダラ幹の敵対を一切許すことなく、七四春闘を革命的実力闘争として闘い抜かねばなりません。

共産主義的主体を確立し人民に奉仕する党風をかちとれ

日向翔

「我々は革命の原動力であるが、同時に革命の対象でもある」とは、「人民一人ひとりの魂にふれる革命」をめざすとして、毛沢東によって領導された文化大革命中にさかんに叫ばれたスローガンの一つです。

この革命が本質的には劉少奇と毛沢東の「社会主義」中国の方向をめぐる路線闘争であり、中国共産党の指導をめぐる分派闘争の性格を有したものであることは否定できませんが、同時にわれわれは、それが毛沢東の「見果てぬ夢」（スタンレー・カーノフ「毛沢東と中国」）の実現をめざすものとして、国際共産主義運動史上にも比類のない、マルクス主義の深遠と根源を問いただす内容を有した、巨大な革命的実験でもあることを否定することはできません。

「革命家の生活は徹頭徹尾革命的でなければならない」と『青春の墓標』中のノートで奥浩平は叫んでいますが、まさに数十年かけて自己が作り出してきた党組織が利害者集団化し、人民の上にそびえたつただの官僚機構にしかなってないと判断した時、自からの手でそれを根底から覆し、人民への還権をなそうと試みた、そんな毛沢東の姿には、われわれは「徹頭徹尾の革命性」の一端を感じずにはいられません。

この毛沢東の挑戦の持つ革命性を評価しきれず、それを理論主義的に論じ、「過渡期と社会主義の混同」というようなことをもって批判しても、問題の本質にはなんら迫りえないことを、われわれは過去の自分達の姿への反省（例えば『理論戦線』11号、東一彦論文）として、切開していく必要があります。

理論的なあやまりはそれとして踏えつつ、党風や作風の問題として、党の人民に対する態度の問題として、われわれには先進的で革命的なアジアの人民に学ばねばならないことが、余りにもたくさんあるということです。

六九年七・六赤軍分派以来の様々な経験、なかんずく近くは足立分派グループとの闘いという経験のなかで、われわれは多くのことを学んできました。すべてが学生共産主義者でしかなかったわれわれにとり、全く新しい体験であり、その中でのたくさんの失敗や誤ちの経験をこそ、われわれは革命的に対象化していくのでなければならなかったのです。

反面教師でしかない足立分派の過去の縮少再生産的繰返し、その中に見出されたあれやこれやの小ブル的自我、或いは早大での川口君虐殺と田中・佐竹の転向問題、そしてそこにおける労働者人民とカクマルの関係、いま様々な外在的・内在的契機を経て、われわれは組織の問題をそれを支える主体との関連で対象化し、同時にどのような政治＝党風が如何なる主体をつくるのかを考察すべき地点に至っているように思えます。

否、今のわれわれにはそれが一番必要であるとも言えます。

共産主義的主体とは何か？　革命的マルクス主義者への自己止揚のためには、如何なる批判の刃を自己自身にさしむけなければならないのか？

一九七〇年初春よりの第三次ブント建設への着手以来、組織の形式をととのえはしたが、それを支える主体を組織的に創りだしえないままに失敗を余儀なくされた、そんな反省をもふまえて、ここにその概括を描き出していこうとすることは、われわれの階級的責務です。

一、二つの主観主義を排し、先進的なアジア人民に学ぶということ

高度な成長をとげつつある帝国主義足下に活動してきたわれわれは、これまで先進的で革命的なアジア人民の革命闘争に対し、支持や連帯をよせてはきましたが、われわれ自身の理論主義の病いゆえに、その闘いから学び教訓をかちとるという作業にかんしては、充分に遂行してくることができませんでした。

特に朝鮮労働党や中国共産党、そしてベトナム労働党の経験や歴史については、われわれの帝国主義的おごりや主観主義ゆえに、それを研究し対象化し、学ぶことなくすごしてきました。それらは主要にはマルクスやレーニンの文献上の語義にのみ忠実で、アジア人民の生活や実存に無自覚であり、イデオロギー上の（例えそれ自体は正しくとも）批判をもって、実践上の批判に置き換えて満足してしまったという、そんなわれわれの過去に規定されています。

マルクス主義の基本的諸原則を民族的風土や歴史、社会生活に正しく適用させていく視点、どのような条件と環境のもとで理論作業そのものがなされ、それは又どのような役割りを担ったのかを分析し、理論を適用していく視点、そういったものの欠落にそれはもとづきます。

今、アジア人民の闘いに学ぶということをも含めて、これらの命題についての毛沢東の提起を見ていくことは極めて有意義です。

いわゆる整風文献とよばれるもの、「われわれの学習を改革せよ」（一九四一年五月）や、「党の活動態度をなおせ」（一九四二年八月）などで毛沢東が述べている命題は、一九二九年頃の「党内のあやまった考え方の是正について」での指摘を発展させ、継承するものとして、主観主義・セクト主義・党八股のおよぼす害悪を最も主要に批判しているということができます。

主観主義、セクト主義、党八股といった場合、セクト主義とは本位主義とか山上主義とも語られ団結には気をくばっても大局的な見地にたてず、党全体の利益、人民全体の利益のことを考えられない、極めて狭い地方・地域的観点のあやまりをいうわけです。

党八股とは主に文章の形式における主観主義のもたらすあやまりであり、要するに人民の実際の生活や活動に関係のない、ないしは解らないことを、長たらしく書いたり、難解な言葉や文字をやたらと使ったり、或いは文章の体裁ばかりに気をとられて中味のからっぽな、そんな文章を書くことのあやまりをいいます。つまり八股文のあやまりということです。

私達が今ここで問題にしようとすることは、それに対し、主観主義の害毒として毛沢東が批判しているあやまりです。

主観主義のあやまりは、毛沢東の言葉でいえば教条主義と経験主義のもたらす弊害ということであり、これはわれわれの言い方でいえば、理論主義と素朴実践主義のあやまりともいえます。

理論主義のあやまりとしてこれまで我々が対象化してきたものは、要するに理論主義的な主体形成主義の害毒ということであり、それは様々な共産主義理論、経済学、哲学などの学習を自己目的化することにより、そのような理論学習のつみ重ねが共産主義的主体をつくりだすと考え、結局思想性が一つの階級的実践と不可分であり、組織性と結合された思想性以外ではなく、従って理論は実践と結合され、そのなかでつちかわれていくことが忘却され、観念化された理論それ自体の発展や、又階級的実践からの自立を目的化していく、そんないわば宇野弘蔵的世界の否定を根拠としていたわけです。

しかし毛沢東が「党の活動態度をなおせ」などでいい、我々が学んとしている教条主義といわれる理論主義の批判は、そういったものとは少しちがいます。

それは「われわれが必要とする理論家とはいったいどのような人なのか。かれらはマルクス＝レーニン主義の立場・見地・方法にもとづいて、歴史や革命の中で生じたいろいろな実践問題を正しく解釈することができ、中国の経済・政治・軍事・文化のさまざまな問題に科学的な解釈をくだすことができ、理論的な説明をあたえることができる人々である。」というような文章に見てとることができる、マルクス主義の原則が歴史の現実のなかに正しく適用されていく必要性と、そのような現実的適用の欠落した理論一般の教条主義のあやまりをいうわけです。

言い換えればこれは「共産主義の基本的諸原則（ソビエト権力とプロ独裁）を個々の点で正しく変化させ、それらを民族的な、民族＝国家的な差異に正しく適応させ、適用する」（レーニン、『左翼小児病』）ということであり、「理論が現実に接近する」（マルクス）ということです。

様々な歴史的現実の中に生起している事象をマルクス主義的に対象化し、現実を出発点としつつ、それを切開し、分析することによって、解説し説明をくわえる、しかもそれを人民にもっとも容易で、わかりやすい仕方でおこなう、これが理論家であり、このようなことができずに現実をわかりやすく説明できない教条をふりまわすだけ、それが教条主義のあやまりだというのです。

このような主観主義、われわれの過去はこのような限界に大きく規定されたものでした。われわれの理論作業も又、指摘されてるとおりのあやまりにつきまとわれた観念性の強いものでしかなかったと言えます。

階級的実践において真に人民と結合し、かつ人民に奉仕しえる党風を確立しぬくためには、だから逆にいえば、日常活動の遂行において我々は、常にこのような問題に心をとめる必要があります。

現実の大衆が生活しており、存在している職場、そこにどんな問題があり矛盾が潜んでいるのかを、最も安易な言葉で、わかりやすく、しかもマルクス主義的に説明すること、それが要求されるのです。そのような作業が実践的に遂行されず、計画的で系統的な暴露が組織できない時、そんな場合にはますます我々の組織活動は観念化し、労働者人民からの孤立の意識が戦役主義や、つたない小ブル左翼主義の表現をとることになるのです。

過去の恒常的武装闘争（論）の三つの内容、帝軍解体、正規軍創出、ソビエト型組織建設の提起は、それ自体正しく必要な命題でも、このような観点との関連で対象化されていかない限りあやまりだったといえます。

つまり革命的左翼の目的意識性を、現実に生起する大衆運動に直接に接木しても、それは決して大衆的課題にはなりえないということです。

理論は現実に適用されねばならず、それはとりもなおさず、現実の歴史を学び、社会的背景を掘り下げ、資料をととのえ、分析し、切開する以外ではないのです。

おかれている与件、所与の条件から常に出発しつつ、職場の状態、生産点の現実という誰にもわかり感ずる矛盾を、階級的に分析し説明していくこと、理論が観念化され教条化されず、具体的なものの豊富化に役立つこと、これの欠落が理論主義であり主観主義であることを、我々は学ぶのでなければなりません。

そして毛沢東は、現実から出発しつつ、それを分析し、下向し、その運動原理をつかみだし、法則的に認識していくことがないまま、つまり経験を理論的に対象化することがないまま、自分の身の回りの小さな体験だけにたよっていくこと、これも経験主義のあやまりとして、主観主義以外ではないものとして退けます。

主観主義とは一方における理論をふりまわすだけの教条主義においても、又逆に自分の小さな体験だけによる経験主義においてもいえることだというのです。前者がマルクス主義の文献解釈的、ないしは無媒介的現実への接木という意味において具体性を有せず、不断に観念的なものにながれ、ために自己の主観を対象に押しつけるだけのことにしかならないのに対し、後者は狭い個人的経験や地域的特殊性だけにたより、それだけを実践の基準にすえることにより、より広く普遍的な、科学的な深化された内容をつかみえない意味において主観的である、どちらもが正しくない作風であるということです。

だからここからわれわれの日常的実践において、組織活動の遂行における主観主義に犯されていないかどうか、対象を獲得できないことを、主体の問題として把え返すことなく、対象のせいに還元していないかどうかを切開していくことができます。

具体的には生産点のなかや、組合をつうじて諸活動において、普遍的ではあるが抽象的で一般的でしかないマルクス主義の公式や教条を、自己満足的に振り回していないかどうか、ないしは逆に現実に発生している様々な矛盾を正しくマルクス主義的に対象化し、階級的なわかりやすい説明を加えることができずに、その現実におぼれ、サロン的な関係に流され、階級的なメスをふるえていないのではないかといったことを、常にふり返り、主体的に反省してみることです。

このことは実践的な例証としては、a賃金格差、長時間勤務、生休や産休、組合活動への規制、労働条件のひどさ、社会保険の有無、住宅問題、通勤地獄といった、労働者なら誰もが必ずぶつからざるをえない現実の矛盾や問題点をとりあげ、そこから出発しつつ、それに現在の日本帝国主義の現状や動向からの説明を加え、又マルクス主義的対象化における階級的矛盾として説明し、日和らずに労働者階級に共産主義的見解をわかりやすく提起するということであり、又b臨時工や社外工、下請などへの不当な差別や抑圧、部落民や在日外国人、沖縄人への規制・差別、分断、障害者排除といった策動に対し、日帝の侵略反革命と腐朽性から説明を加え、そのような策動の根拠を解明し、そこからブルジョア階級への反撃を組織していくということとして提起することができます。

いずれにしてもそこでは世界対象化に[illegible]は、実践的な階級的主体よりは狭い視座しか持ちえない状態にある労働者人民の、各々のおかれている関係性をとらえ、自分の納得している視座だけから語るのではない、具体性ある提起が必要であるということです。

このような問題に留意すること、これがわれわれの作風や党風における二つの主観主義を排す、一つの方法であり、人民に奉仕しえる党風と、それを支えぬける共産主義的主体を確立するにあたっての一つの条件です。

二、対象を変革しえる主体の問題

さて党の作風における主観主義を排していくということは、それを支える主体が共産主義的に自己をたかめ、組織的な主体として強化されていくということと同義なわけですが、そこにおける主体と客体の弁証法的関係性についても、我々は抽象的なそれとしてではなく、具体的なレベルの問題としてとらえかえしておくのでなければなりません。

つまりブント的客観主義、理論主義、何でも人のせいにする没主体的な雇われ人思想を、徹底的に根絶していくためにも、我々は対象と主体の「関係」の弁証法を、ここでマルクス主義的にとらえなおしておく必要があります。

まずよくいわれる対象変革と自己変革ということの意味ですが、これは本来的には人間が対象としての外的自然にかかわり、生活資料を生産していく労働行為の関係性から導出される概念です。

自然と人間の関係は、歴史の本源的な行為としての直接的生活の生産において、人間が自然に対し労働力を供出し、それを変革し、自然から生活資料を得るという質料交換の繰返しのなかにみてとることができます。この場合主体としての人間は自己をとりまいている対象としての外的自然にかかわり、それをつくりかえることによって主体の生命活動を維持するわけですが、しかしながら人間＝主体は同時に対象としての外的自然の一契機としての存在でもあるわけです。自然の一契機としての人間が、自然を変革するということは、同時に自己自身を変革しているということに他ならず、このような関係性を対象＝自己変革としてみるのです。

例えばマルクスはこのような命題に関し、初期の『経哲草稿』においては、「自然は人間の非有機的身体、つまりそれ自身として人間の肉体でないかぎりでの自然である。人間が自然によって生活するというのは、ひっきょう自然が人間の身体であり、人間は死滅しないためには、あくまでもかかる身体との不断の過程にあるのでなければならない、ということである。人間の肉体的および精神的生活が自然と関連するということは、とりもなおさず、自然が自然自身と関連するということに他ならない。なぜなら人間は自然の一部だからである」といってます。

それはさておき、このようなものとしてとらえられる対象と自己の同一性や矛盾的自己同一の概念は、更に根源的にはヘーゲルの『精神現象学』における意識の運動、唯一の弁証法的理性を持った存在であり有的存在としての意識が、次々と対象を措定し、自己疎外におち入り、対象について思惟＝労働し、再び自己にかえってくることを繰返しながら、宗教・法・国家と世界そのものを創造し、遂には絶対知にまで至っていくという運動を根拠にしているわけです。

又これを裏返しにして「ヘーゲル的概念のレーニン的転倒」と称し、意識ならぬ弁証法的理性を有した「物質」なるあってなきものが、次々と自然や人間をつくり、階級闘争をも生み出し、自己止揚をとげて共産主義社会に至っていくというのが、「裏返しのヘーゲル主義者」たる黒田寛一の『ヘーゲルとマルクス』であり、黒田哲学とよばれるものの内実です。

そういったことをふまえたうえで我々は、主体が対象を獲得していくためには、主体そのものが対象のおかれている関係性を知り、そのような関係性の中での意識＝状態をつかみ、その立場で物を考え、思考し、そうしてそれを自己の立場＝関係性からとらえなおすことによって批判を加え、ということは実は経験を交流するということですが、過程的なものでしかない自己自身の変革ということをもバネとしつつ、対象を獲得するようつとめることを学ばねばなりません。

対象＝客体に対する批判が正当なものでありえるためには、対象自身のおかれてる状況や関係性を、批判する側の主体がつかまねばならず、一度は自己自身を投影しなければそれはわかりません。

そして対象の関係をつかみとり、その立場にたちつつ、主体の提起すべき内容を提出していく時には、逆に主体自身の過程性がはっきりとし、批判は経験の交流となって具体性をおびると同時に、対象の変革と主体自身の自己変革をも必然化させずにはいないのです。弁証法的な相互止揚の構造とは、やはりそのようなものでしかあり得ません。

しかもその場合、主体が対象のおかれている状況や関係をつかみきるためには、対象に対する単なる感性的把握では不充分であり、より下向的分析を加えた理性的把握、対象認識における概念的把握が必要となってきます。そのためには主体自身は対象に対し、どうしても理性的な立場にたたざるをえないのであり、そのような態度と方法こそマルクス主義的なものなのです。

このことをもっと具体的に見てみるならば次のような例をあげることができます。

例えば長い間組合活動に従事し、当局との交渉にあけくれ、戦闘的ではあってもその枠を破ることなくすごしてきた職場の活動家がいるとします。

このような部分をオルグしたり、意思統一をかちとっていこうとした場合、我々は多く苛立ち、我々の立場だけから問題を提起し、なかなか納得されないことが常なので、結局「組合主義者！」などときめつけて組織しがちです。

しかしながら、我々が不充分ではあっても党的な組織活動に従事し、そこにおける関係性や視点から問題をたてた時、それが正しいかどうかの判断は、同じようにそのような経験を持った部分によってしかなせるものではありません。すなわち組合活動にしか従事したことのない部分には、正しいかどうかを判断することはできないし、又逆に自分のおかれている関係、組合内的な関係や当局との関係においてしか、実践的な判断の基準は見だしようがないのです。

だからその場合には、教条化された党の理論一般よりも、実践的な組合活動上の方針や指針を討論することが必要だし、そのなかから活動そのものの遂行における党的な部分と組合的な部分の差異を明確化させていくことが問われます。又党のほうにひきつけるのではなく、一たん組合活動上の経験として必ずありうる諸内容にもどり、その解決の仕方や方法をめぐって討論を重ねることができます。

そうしてみると、逆に我々などよりははるかに深い組合活動の経験により、我々は組合活動の多くについて、彼から学ぶであろうし、我々自身の提起の観念性やあやまりに気ずくかもしれません。

その場合には主体＝自己自身が変わる必要があるのであり、そうすることによってのみ組合活動から党的活動への対象の移行はかちとれることになります。ということは、とりもなおさず常に対象が過程的であると同時に、主体もまた過程的であることを自覚しなければならないということです。

そうして真に対象自身のおかれている状況をつかみきり、その立場から問題を提出していくならば、批判は経験の交流として具体性を持ち、失敗やあやまちは経験の蓄積として、正しく総括されさえするならば次の教訓にもなるのです。

組合などで、そこにいる活動家の意識と状態にあわして討論をすすめるということは、決して我々が組合活動に埋没したり、組合主義になってしまうことを意味しません。

対象にとり外的でしかないものをふりまわしても、決してそれで対象が変革されたり獲得されたりするわけではないということです。

だから相互批判というようなものは、根底的には批判しあうものの体験や経験の交流であり、それまでの歴史性や失敗の教訓による経験の豊富化の作業と同じことであることを、我々は学ばなければならないのです。

そして又同時に、客体としての対象を獲得したり、党的に発展させるためには、主体のがわが対象の立場にたち、そこでの見方考え方で思考し、それに共産主義的な批判を加えることによって、自己自身の変革をも契機とした相互作業としての、対象の変革をなしとげていくのでなければならないのです。

毛沢東はこのような問題に対し、「病いをなおし人を救う」ことが、共産主義的な批判の作業であると言ってます。（対象を批判することと、対象を主体の側に獲得することは同じことであり区別できません）

つまり第一には「以前のことをこらしめて以後のことをいましめる」のであり、第二には「病いをなおして人を救う」のが、共産主義的な批判の目的であるというのです。

以前のあやまちについては科学的な態度で、過去のまちがった事柄をあばきだし、分析し批判することによって、今後の活動をもっと慎重にさせる、よりよくさせる、しかもそれは医師が病気をなおすのと同じで、もうだめだと診断することではなく、彼の病気をなおしてやり、りっぱな同志にかえてやるようおこなうのだというのが、そこでの主旨です。（「党の活動態度をなおせ」）

思想上の欠陥や政治上の欠陥には決して乱暴な態度をとるべきでないという、革命的批判の原則にそった党内闘争を貫徹できなかったため、又々不毛な分派を余儀なくされた足立分派問題をも反省して、我々はこのような党の団結をつくりだすための諸問題に、今後は特に留意していくのでなければなりません。

次にそこで、主体が対象を正しく批判したり、又獲得していくためには、対象の存在構造を徹底的に分析しなければならず、又科学的な立場にたって概念的に対象を認識しなければならないという問題について、ふれるならば次のようなことがいえます。

すなわち我々が客体について見ていく時、そこにあるがままのものを、あるがままの状態で把握する、例えば一人の組合活動家がいれば彼の外見や格好で外的に判断するという状態は、対象認識における感性的把握ということにすぎません。

常にそのような状態から出発しつつ、当然次にはそれではその組合活動家がどんな労使関係のもとにおり、又どんな仕事をしており、どのような関係性の下におかれているのかといったことを、我々は分析する、ないしは反省しなければならなくなります。

社会科学の問題としていえば、諸階級や人口といった表象から出発し、市民社会の解剖を本源的蓄積過程との関係においてとらえ、商品や価値や私有財産といったものをつかみとっていく過程です。これは認識における悟性的段階であり、分析をつづけることによって原基的なフォルムがつかみだされる、構造的な把握の時期です。

しかしながら対象を完全に主体がつかみきるためには、対象が有してる客観的な構造をつかみとるだけでは不充分です。

更にそのものが有している運動原理、法則性といったものをつかみとることが必要です。

ブルジョア社会における労働者階級の矛盾や苦悩は、つきつめていけば賃労働と資本の関係に還元されていくはずですし、又そこでの変動には一つの法則性がつらぬかれていることを知ることができます。

例えば資本の有機的構成の高度化により、ふだんに過剰人口が形成され、産業予備軍が生みだされていくといった人口法則に関する問題、需要と供給の関係の中で商品価格は結局、そのものの価値に接近しつづけるという価値法則、一つの企業の合理化や新しい生産手段の採用による利潤の拡大も、結局はすべての企業がその生産手段を採用することにより均等化されることにしかならないといった利潤率均等化法則、これらの経済法則とよばれるものが市民社会の根幹をつらぬく法則であることを知るということです。

このような立場、対象認識における概念的把握＝理性的把握さえなすならば、主体は逆に対象の様相の変化や変動に、動揺したり困惑したりする必要がなくなります。

日食や月食は未開の人達にとっては大自然の驚異であり、神秘的な神の奇蹟でも、太陽の自転と地球や月の公転の連関を知った現代人には決して驚異ではありえません。

そのように、対象をそのものの持つ運動原理や法則との関係においてつかみとることができる立場が、理性的な立場であり、マルクス主義的な主体が死を賭し、何物も恐れず闘うことができるのは、対象に対するそのような把握をなすからです。

そうして客体を知り抜くための分析と切開、それを対象自身の立場にたってなしきること、しかも観念的にではなく実践的にそれをおこなうことが必要なのです。

つまり対象認識という問題は実践的なことであり、観念的な命題ではありません。

実際に見たことのないものに対する百万語の説明も、一見にしかないことは、全くことわざのとおりなのですから。

農民のことを本当に知り、農民の苦悩を己がものとなし、それを真にうけとめるためには、理論的に知るのではなく実際に知ることが必要です。

真の対象認識は従って実践的なものであり、又実践においてのみ可能です。極端にいえば漁民のことを知るためには、そこにいき漁民自身になりきらなければならないし、農民の気持や心情や生活を知るためには、実際そこにいって苦楽を共にして生活してみなければわかりません。

理論は現実の前では灰色であり、いかなる具体性も現実の前には比べようがありません。

結局、我々が真に組合活動家について知るためには、実際そこに自分がいってみなければならないし、又漁業にしろ農業にしろ、実際にそこにいって自己の経験として生活そのものをつかみとってこなければならないのです。

しかもそれを単に感性的な経験として表面的におこなうだけではなく、農業問題や漁業問題の本質を理論的に分析し、実践を方向づけ、あとづけていくこと、そのような繰返しが必要となってくるのです。

これをやりきらないならば、我々は決して労働者人民の苦闘や苦渋を、己がものとなすことはできず、客観主義にはいり、又主観主義におちこんでしまうのです。

共産主義的な主体の強さないしは普遍性、それはだから常に実践的なもの以外ではなく、単なるイデオロギー的な対象の認識からは生み出されることはありません。

実践をつうじきたえられ、言い換えればそれをつうじ強化されていく価値判断の強さ、それこそが共産主義的主体が獲得すべきものです。

そして主体が対象に対しかかわりを持ち、それを真に止揚された地平で獲得するためには、あらゆる苦悩や苦痛を自己自身のものとして感受しえるまでに、対象の中に入り込んでいくこと、対象自身になりきることが必要であり、そのような過程を経て対象の苦悩を解決した時、はじめて真に対象＝客体の世界をわがものとなしえる共産主義的主体がつくりだされるのだということです。

全人民に奉仕しえる党風、それを支えぬける主体とは、そのようなものでしかありえません。

三、総括の仕方などにおいてプロレタリア的体質を持つということ

真の共産主義的主体性に支えられた党風とは又、党の団結を第一におき、人民の団結を第一におく党風であることは言うまでもありませんが、そのためには対象の認識や獲得におけるプロレタリア性と同時に、組織的総括などにおけるプロレタリア性をも克ちとっていなければなりません。共産主義的主体のプロレタリア性は、組織的対処におけるプロレタリア性と等しく同義といえます。そこで我々は次に、組織的総括の方法などにおける小ブルジョア性とプロレタリア性の差異といったことを確認しておきたいと思います。

つまりこれまで我々は様々な機会に、総括における結果解釈主義や路線手直し主義といったことを問題としてきました。

結果解釈主義とは例えば六十年安保闘争は平和と民主主義を守る闘いであったというようなそれをいうのであり、一つの闘争なり組織なりのムーブメントにおいて、最終的に「結果として」「そうなった」ということを起点として、その結果に対し意味付与し解釈していくといった作風です。

そこでは何故そうなったのか、又何がどのような過程をとることにより、そうなっていったのかといったことが分析されないため、現実の対象化がただ主体の観念の中における意味づけの変更としてしか実現されず、ためにあやまりや失敗を犯してもその根拠から正しく切開されることがありません。

具体的には日米軍事同盟としての安保条約粉砕を闘った第一次ブントが、その闘いの推進のなかで分裂していった時、その根拠に対し切開を加えることなく、「六十年安保は平和と民主主義の闘いだった、だからこれからは反帝だ」といったところで、何も主体にとってのあやまりの是正には連なっていきません。

それは観念化された六十年安保なるものに、勝手な解釈を加えただけであり、実際に分裂していった安保ブントの限界は何も解明されずに残るだけです。

このようなあやまりがもたらされるのは、主体が対象的な客体にかかわっていく（六十年安保ブントが六十年安保闘争にかかわっていった）構造が分析されておらず、主体が客体を変革しえなかった問題を客体のせいに押しやっているからです。

どのようにかかわったのか、ないしはどのような構造の下に闘いにくくわわったのかが解明される必要があるのです。

その場合には過去の経験との交流が必要ですし又やれもしない大きなことをアドバルーン的に打上げるのではない、小さなことでもやり切れることをきちっと物質化しきる体質、計画したことを獲得しきるリゴリズムといったことが組織体質の問題として問題になって来ます。又ひとえに総括は主体から出発して主体の強化に還元されていくものとなる筈です。

つまり結果が何だったのかとか良かったか悪かったかを総括するのではなく、自分達がめざしたことがたとえ小さなことでも、きちっとやりきれたかどうかを問題とし、やりきれなかったならばそれは何故かを切開していくことです。

そうすれば一つ一つの闘いから、我々は様々な経験の蓄積をなすことができ、それは次の前進の糧になるのです。

路線手直し主義というのは、結果を解釈するだけのような党風の場合、しばしば生み出される作風ですが、こうなったのは路線のせいだからこれを別のとかえよう式に、主体を転換しようとするのではなく、客体化された党の路線や理論を批判することにより、結局は主体を合理化していくという、やはりあやまったものです。

例えば七一年の秋期闘争時、一〇・二一より十一・一九そして十一・二〇の過程で、我々は様々な技術的失敗やミスを繰返しました。

このことをめぐる総括論争の時、「これは恒武闘争路線が論理主義的で、具体性がないからこうなったのだ」というようなことが、それを担った運動指導部から提出されました。だから恒武闘争路線の論理主義を総括し、路線を変えようというのがその主旨です。

しかしミスや失敗はあくまでもミスや失敗であり、それを担った主体の問題であって、それ以外ではありません。

恒武闘争路線を客体化して擬人化し、それに反省の根拠を転化することによっても、あやまちを構造化させている主体はそのまま残るだけであり、何も前進していくことにはならないのです。

この結果が四人委員会問題であり、今の足立分派に連なっているわけですが、このような対処は結局党を混乱させ、同盟を分裂させただけで、何も革命的なところがありません。

もちろんこのようなわかり切った問題さえも、正しく党的に解決できず、無用の混乱を拡大させたのは、病いをなおし人を救う形で批判を展開できず、もうだめだと追い込んでしまった我々の批判の小ブルジョア性にもとずいています。それ故現在的には我々は、このような我々の政治の小ブルジョア性を真摯に総括していく以外ありません。

しかしいずれにしても言えることは、以上のような二つの総括方法は小ブルジョア的対象化であって、決して主体を強めず、プロレタリア的なものではないということです。

正しくプロレタリア的に問題を対象化するとは自分達のあやまちや不充分性を暴き出すことであり、決して自分の都合のいいように歴史を[illegible]なおすことではありません。

一つの行為、一つの理論、一つの実践のいずれに対しても、それが良いことであろうが悪いことであろうが、主体的に継承し、切開を加えていくということです。

政治組織総括とは主体の不充分性をあばきだし克服していくということであり、あやまちでも継承するということ抜きには、何ら主体的なものとはなりえません。

第三次ブントの四年間にわたる歴史は、それがどのようなものであれ、それを担ってきたすべての活動家、同盟員の歴史であり、それ以外ではありません。

だからそれを、「誰々のせい」に還元していくようなことはやってはならないし、又正しくはないのです。

又それと同時に実践的総括を理論的基礎に還元していくといった批判が、特にカクマルコンプレックスが強い「自称理論家」達から、提起されます。

例えば純・戦線問題に関し、MUP共闘と対立関係に入ったのは、○○の××論文に根拠をおいている等というものです。

具体的には六七年の一〇・八羽田闘争頃の社学同の機関誌だった『理論戦線7号』の××論文を批判することによって、我々のMUP問題に対する批判とする、などという類です。

しかしながら特に政治組織の論文や理論は、その時々の実践の指針なり総括として提起されるわけで、その時の歴史的状況や背景抜きには正しくとらえかえすことはできません。

フルシチョフのロシア共産党二十回大会以前の各国共産党員の文章や、ハンガリー革命以前の誰それの文章に、スターリンを讃える一節があったから、あいつはスターリニストだということには決してならないのです。だが主体が未熟であり、必ずしもプロレタリア的であるとはいえない場合など、そのような押しつけや、強引な根拠づけがえてしておこりがちです。

我々にも又、決してそのような傾向から現在的に完全に自由であるわけでもありません。六八年なら、その時の社学同の方向を提起されるために書かれた文章は、そのような歴史性に規定されるわけであり、批判や適用は、そのような範囲のなかでのみなされるべきであり、そこにおいてのみ有効です。

現在の足立分派の、全く背のびした批判、今頃になって六年も七年も昔の文章を批判するという超時空的観念論、このような傾向も我々は克服していかなければなりません。

それはさておき、だから問題を正しくプロレタリア的に切開するということは、党の団結を強化し、人民の団結を強化する方向で、主体の歴史性を継承し、それに責任をおっていくということであり、歴史を現在の都合からとらえかえすのではなく、歴史のその時々における主体の対処と実践に責任をおっていくということです。

あやまちに対しても成功に対しても内在的に対象化した時、はじめて正しい歴史的蓄積は可能であり、次の発展のバネが形成されます。そういった総括の仕方こそプロレタリア的なのです。

我々にはこのような正しくプロレタリア的な対処の典型を、レーニンのプレハーノフやカウツキーに対する批判のなかにみてとることができます

例えば『プロレタリア革命と背教者カウツキー』のなかで、レーニンはカウツキーの革命的祖国敗北主義への敵対や、何よりもロシア革命は農民革命でありプロレタリア革命ではないという批判を猛烈に攻撃し、徹底的に論破していますが、次のような言い方をしています。

「われわれは、彼がマルクス主義的歴史家となることができたこと、最近の背教にもかかわらず彼のこういう労作が、プロレタリアートのてがたい財産としてのこるだろうということを知っている」

「まだ背教者でなかった一九〇九年にカウツキーは、いまや時期尚早の革命をおそれることはできない、敗北をおそれて革命を拒否するものは、うらぎり者であると書いている」

レーニンはカウツキーがドイツの戦時公債の発行に支持を与え、祖国擁護の立場にたったことを批判していきますが、決してカウツキーの全政治活動を否定しているわけではありません。政策や路線をめぐる対立としてカウツキーへの批判をおこない、しかもカウツキーがなしたマルクス主義理論戦線への貢献に対しては、これを公然と評価しているのです。

又『知られざるレーニン』というメンシェヴィキのヴァレンチノフの著書によれば、レーニンと政治的な敵対関係にあったプレハーノフの哲学を、ヴァレンチノフが批判すると、「ロシアマルクス主義の父としてのプレハーノフの業績と、政治的実践におけるあやまりを一緒くたに論じるのは不当である」と言い、むしろヴァレンチノフを批判したということが書かれています。チェルヌイシェフスキーの著作に対しても、同じような態度をとったといいます。

我々はこのようなレーニンの対処のなかにこそ限りないプロレタリア性を感ぜずにはいられません。レーニンは自分がプレハーノフやカウツキーにさえも学んだことを隠そうとしないし、又その革命運動での実践があやまった方向にむかった

〔二面より〕

としても、彼らがそれ以前になした蓄積は、そのことによってなくなりはしないというのです。こういう問題のとらえ方、先人への対処は全く正しいものと言えないでしょうか。

比較しても仕方ありませんが、第三次ブント建設の四年にわたる闘いの中で、自分がそれを担いむしろ自分のあやまりや失敗によって問題が拡大したりした、そんな組織の全歴史性を、そっくり誰かれのせいに押しつけて総括にかえてしまうというような足立派のチビ官僚の対処が、全く子供じみたものでありレーニン的な組織体質にほど遠いものでしかないことがうかがわれます。

大体路線や政策をめぐっては何も言わず、ありもしないデマやウソで個人への人格的批判を集中するというようなことは、もっての他です。

我々には第三次ブントの全理論作業を継承するし、又それを擁護するのでなければなりません。その中からあやまりや不充分性をつきだし、内在的に克服していくのでなければならないのです。

最近はどうだかわかりませんが、このような例として、中核派が黒田寛一の理論作業を正しいものといい、自分達の理論的基礎として認めているのを、かつて我々は見たことがあります。このような中核派はやはりりっぱです。

現在の黒田寛一の人民へのカクマル議長としての敵対が、いかに反革命的なものであり、許しがたいものであれ、かつて黒田寛一の書物を中核派が読み、それに学んだことは事実だし、又それを認めたところで、決してカクマルを認めるということにはならないのです。

レーニンがプレハーノフの理論作業に過去において学び、カウツキーの実践と同じ道をたどったこともあったことを認めても、決して現在のそれらを容認してることにはならないのとそれは同じです。

むしろ自己の過去の歴史性に対し誠実であるという点で、そのような対処こそプロレタリア的であり、革命的なのです。

これとは全く逆に、現在の足立派などは自分達の過去の実践を全く清算しきり、どんなにこじつけてもでてくる筈もないカクマル主義者などという批判を、無理に我々に押しつけ、それで自分達が救われたような気になっていますが、何の論証もない、歴史性もないそういった対処は、歴史をネツ造し、嘘を真実といいきるファシストや排外主義者の常とう手段です。

そんなスターリン的、或いはヒトラー的政治宣伝やデマの流布が、如何なる共産主義をもたらし、それはすべての人民が、人間として尊厳ある生活を営むことに連なっていくのかどうかを、真摯に自問するべきです。

我々は何一つ対処していないのに、恐怖にかられ、大さわぎし、カラ騒ぎを繰返し、排外主義的団結を作ろうとしている、そんな自分達こそ排外主義者であり、カクマル主義者なのだということを知るべきです。

ともあれこのようないくつかの観点から、我々はレーニン的な組織体質や継承性、総括の方法などにおけるプロレタリア的主体性というものを学ぶことができるし、又中国共産党などが七億の人民を結集させる党風をつくり出している根拠を知ることができます。

七十年代階級闘争が、革命の現実性にうらづけられていることを確信する程、正しいプロレタリア的党風へと組織を止揚し、主体を強化していくことは早急の任務です。

四、スターリン的党風の解体と人民に奉仕しえる党風

ところで今まで見てきたような事柄は、我々が主体形成主義におち込んだり、学習会主義に染ったりすることを決して意味しません。むしろ我々は前衛ショウヴィニズムを排し、現在の新左翼全体がおち込んでいる混迷を打破していくために、これまでの新左翼運動を脱皮した、真に人民に奉仕しえる党風へ我々が自己止揚をとげていくことを問題としているのであり、足立分派的純プロ主義や左翼反対派運動のあやまりから、我々が本当に解放されていくことを課題としています。

その意味では我々の過去に大胆な切開を加え、「革命的暴力とは何か」をいくら理論的に対象化しても、川口君虐殺にはしらざるをえないような、又はてしないテロ戦にはしらざるをえないような、カクマル運動に象徴される革共同的前衛党主義をも克服し、真に人民を解放しえる党風の確立をかちとっていくことを目的としています。

我々はこのような党風の転換の問題として、いったん革命的主体の問題についてもふれ、大きな原点をつかみとっていこうとしているのであり、実践的には毛沢東と中国共産党の「三大規律・八項注意」に代表される革命的な作風に、大きな感化をうけています。

日本の中共派から学ぶことは少くとも、本当の毛沢東思想から学ぶものは、レーニン主義の豊富化としてはかりしれないと考えています。

その場合には我々は、毛沢東にしろ中国共産党にしろ、いわゆる中間地帯論とよばれる「国際共産主義運動の総路線」的な戦略論上の問題、「実践論」や「矛盾論」に代表される哲学上の問題、過渡期社会建設上での「社会主義の下での階級闘争論」など、社会科学的に論じたり、イデオロギー的に対象化しなければならない多くの問題においては、非常なあやまりが多く、又日本には適用しえないことにみちていると考えています。

しかしながらそのことと、党の作風や革命の経験から学ぶこととは全く別であり、区別されて論じられなければならないというのが我々の基本的な観点です。

そして何故我々が先進的なアジア人民から学び、中国共産党に学ばねばならないのかについては、日本の新左翼がその根幹において未だ真に人民に奉仕しえる党風を確立しきれておらず、従って真の人民の解放をもなしえない状態にあるということが、その理由です。

別の言い方をすれば、中核派に代表される日本共産党の模倣路線にしろ、カクマルの反スターリン主義運動としての日共のりこえ運動にしろ、結局のところ日本共産党が労働者人民との間につくりだしている関係、ロシア共産党的な人民を支配する党の構造と、別のものをつくり出してはおらず、結局同じであると我々は考えるからです。

しかもこのことは徹底的に暴力的で戦闘的な前衛党理論の問題としてとらえかえそうということであり、叛旗や情況のような小ブルインテリの自己満足的な観念的世界への逃亡、日和見主義の合理化とは全く発想を異にしています。

「如何にして権力を打倒するのか」という命題を、「如何なる共産主義をつくるのか」という根本思想との関連でとらえかえすべきこと、これはあの猶吉な連合赤軍の同志に対するリンチ殺人事件、カクマルの川口君虐殺、そして第二次ブントの崩壊、八派の解体、武装闘争の挫折という経験をへてきた現在の日本革命的左翼にとり、回答すべき根底的で焦眉の命題であり、文化大革命という巨大な挑戦と思われるものに当面した我々の、さけてとおってはならない任務です。

では一体、スターリン型共産主義からの訣別として、我々は何を否定していかなければならないのでしょうか。つまり革共同両派が日共と同じもののしかつくり出しておらず、それは根底的にはロシア共産党の流れと同じものでしかないと、我々が考えることはどんなことでしょうか？

それは極めて抽象的に言えば、次のようにまとめることができます。

①、党員と非党員のあいだでの差別・分断が止揚されていないという問題。

これはカクマルに最も特徴的なわけですが、自分達の党内では反スターリン主義を語り、組織的関係における上下の平等や官僚主義の克服をかたっても、人民との関係や諸派とのかかわりにおいて全く本位主義的であり、セクト主義的であって、むしろ人民の敵対者へと実践的にはなっているということです。

毛沢東は党官僚の子息などが過去の士豪劣紳にかわり一部の特権的な階層となり、人民とは別の権限を持つようになっている、そんな現実に対し、上海コンミューンにみられる人民への権力を提唱したといわれていますが、日共にしろカクマルにしろ、そういったことが問題とされたり、又克服していこうといったファクターを一切有していません。

東ドイツやチェコスロヴァキア、ポーランドなどにおいては、この問題が「人民の支配者」としての党に対する大きな不満として潜在化しており、それが「プラハの春」や「グタニスクの反乱」につながっているといわれます。

組織の中でいくら反スタ的関係が問題にされても、党の外に対しては排外主義とならざるをえない、そんな前衛党は、被抑圧人民の利害を守り抜ける党とはいえません。

具体的な例として川口君虐殺や早大でのカクマルの諸派狩り、テロリンチがあり、又日共の反トロキャンペーンや、セクト主義があげられます。我々のMUP共闘に対する対処も、このような陥穽から自由ではありませんでした。

これは理論としていくら反スタが叫ばれても、実践的党風としてはスターリン主義を克服しえず、むしろその亜種的なものへと不断に転落してゆく、ひとえに組織体質と革命主体の問題として、党風の問題としてとらえかえされるべきことと思われます。

それは根源的にはレーニン主義の骨格ともいえる、大衆の自然発生性と革命的共産主義者の目的意識性といった命題に根拠をおくのかもしれませんが、それを理論的理解の仕方をかえるというような、理論主義的な総括としておこなっても不毛です。

むしろどういう論争の中で何を目的としてこれが強調されたのかを考え、レーニンがナロードニキや経済主義者との論争のなかでこのことを強調したことは、レーニン自身にとっては大衆に対する敬愛や信頼と少しも矛盾するものではなかったことを理解するべきです。

ということはこれは理論一般ではない、階級的実存の問題であり、共産主義の内実に関する問題であると、対象化しなければならないのです。

②人民の意志を党が代弁するのではなく、党の意志が人民に押しつけられていく問題。

党内問題や分派闘争などにおいて、政敵に対する粛清が暴力的テロルとしてなされる場合など、正しい党的対象化がないままにそれが拡大していくと、人民を党＝権力者がテロルというような関係として、疎外された政治関係が構造化されます。

これは「人民を大事にし、人民を助け、人民を守る」といった精神によって、党と人民の根本的な関係がとらえられず、党が人民を支配するものとして、党にかかわる人間があやまった人民との関係に安住している場合におこる問題です。

党が人民の上に君臨するのではなく、人民に奉仕し、人民の利害を守る部隊として自からを組織していないと、このような逆転は生じるのです。

これは党組織が自からを人民に対し、どのような関係にあるものとして位置づけるのかという基本にかかわることであり、スターリン型共産主義には支配し君臨する党の姿はあっても、ないしは大衆を操作するといってもいいのですが、人民に奉仕する、人民のためになることだけをおこなうという党風はありません。

これはやはり共産主義の根本精神からの背反です。

毛沢東の大躍進政策と、農業集団化に対し、帝国主義との直接的な戦争を直前にしているとはいえスターリンのクラークに対する血の粛清は、大きな政治のちがいを我々に感じさせないではいません。

③大国利害の小国への押しつけ、大国ショウヴィニズム、国際主義の欠落。

これはコメコン経済体制の中における国際分業において、ソ連邦とその回りの東ヨーロッパ諸国の産出品が、全く分断され、ソ連国民のための農作物をつくることを余儀なくされ東ヨーロッパ諸国が工業化を実現できず貧困にあえぐといった事態にみてとることができ、又日本共産党が他の反対政党に対しとる独断的な政治宣伝などに類型をみてとることのできる、一言でいえば様々なセクト主義の拡大された形態です。

これは党と人民との関係の疎外が、国家関係においても固定化される結果生み出されるものであり、本質的には国際主義を欠落させた一国社会主義建設可能論のもたらす害毒です。

ソ連邦が世界で最初の労働者国家として成立し、その後の変質をとげつつも、闘う各国人民にとり何の援軍にもなりえなかったという、いわばスターリン主義批判の根本にかかわる問題としてこのことはあります。

そしてこのたぐいは、諸派に対する全くのセクト主義、他党派解体主義、ないしは中核派などの八派共闘などでの引回し、自派のことだけを考えて他をかえりみない利用主義などにおいて、我々自身のうちにもすべからく縮少された表現としてみてとることのできることです。

このような党風はやはり正しい共産主義とはいえません。

いずれにしてもこれらのスターリン主義的な共産主義のもたらす害毒、我々はこれから自からを訣別させ、真の人民の解放をかちとれる組織へと自己止揚をとげるのでなければならないと思えるのです。

つまり人民と党とのこれらの関係性は、反スターリン主義を標傍し、イデオロギー的にそれを対象化している新左翼にもやはり根底的には克服されないまま残っており、我々においても、主観主義的な前衛党建設の弊害として、多く持ち続けているものです。

これの克服はひとえに共産主義的政治の実現の問題であり、理論一般の深化によってはかちとれない課題です。

我々が「人民に奉仕する党」をいい、被抑圧民族・人民の利害を徹底的に守り切る闘いの貫徹をめざすのは、まさに少しでも対象化しようとしていることを組織的に獲得していくためであり、同盟の根本体質における総括としてこの作業を遂行しようとしているのだということが、確認されなければなりません。

我々は共産主義的政治を貫徹でき、真に人民を解放しえる前衛党をめざすのでなければならず、そのためにはこれまでの組織的実践の全歴史性が決して清算されてはならず、革命的に継承され、そこにおいて一切の限界が怜悧にあばきだされていくのでなければならないのです。

我々が「MUP共闘その他諸君への自己批判」をなし、「HBF問題に対する自己批判」を真摯になそうとしているのは、まさにそのためであり、これは決して小手先の足立分派的な「政治的のりきり」のためではありません。

人民に奉仕し、徹底的に人民のための闘いを構築できる党になるためには、大衆に対し恫喝をおこなったり、暴力をふるったりしては決してならず、テロやリンチを廃絶し、人民の正しいと思うことのみをなさねばならず、そういった観点の欠落として、HBFやMUPの問題をとらえかえす必要があります。まさにそのような共産主義的政治は、同盟の基本路線を大衆においてことによってなされ、大衆闘争として一切を解決していくことがめざされるべきであり、その原則が忘れさられ前衛ショウヴィニズムにおち入った地平に、我々のあやまりはひそんでいたのです。

セクト主義の問題、前衛ショウヴィニズムの問題、統一戦線や共闘機関へのかかわりの問題、被抑圧人民・民族の利害を守り抜ける党になるためになそうとしている我々の一切の努力は、徹底した大衆路線の実現の方向に解決されるのであり、共産主義的主体の強さの獲得としてめざされるべき方向は、この徹底した大衆路線を担い切れる主体をつくりだすこととしてとらえかえされるべきです。

戦旗派の敗北は、これまでのスターリン型共産主義の延長にあるものでしかない、革共同両派にみられる小ブルジョア・リゴリズム、大衆を支配する党の関係を廃絶できないまま前衛主義におちこんでいった点にあるのであり、そういった試練に耐え切れない部分が、自己の方向を逆転させ悪質NRに次々と転落していくことによって、サークル集団からの党批判を構造化させていくことを克服できなかった点が問題なのです。

我々が理論的に対象化してきた「党の論理」は、それ自体徹頭徹尾正しいものであったと言えますが、我々はそのことの対象化で手いっぱいであり、そのような党それ自身が人民との間に如何なる関係をとり結ぶのかを、ともすれば忘却しがちでした。

足立分派問題はたしかに大きな後退であり、脱落分子の反前衛的集団への実質上の転落は、戦旗派の党風を根底から問いかえす鏡となりました。

しかしながら我々は、このことを一つの頂点となす試練に直面することにより、大きな反省の契機をつかみとったのであり、これはより高い視野からみれば根底的な我々の前進であり、進歩といえます。

この大きな失敗と後退を、より遠くへ跳ぶための後退ととらえきることができるかいなかは、ひとえに我々の徹底した内的反省と努力によるのであり、確固たるプロレタリア的な決意により、必ず我々はその作業を遂行しきるのでなければなりません。

敵に対してはあくまでも容赦なく、おそれをしらず大胆に闘い、徹底した人民のためになることのみをおこない、これまでの新左翼運動の地平を一歩前進させること、そのために共産主義的主体としての自己を問い直し、革命的な戦旗派の大胆な再生をかちとっていくこと、これこそがここにおける全対象化の一切のねらいです。

☆　☆　☆

本山—部落—三里塚との結合を強化し春闘勝利へ

西部地区春闘共同闘争委

3・1ゼネスト支援に決起

新宿駅でゼネスト支援に決起する西部地区の労働者

全国の労働者の皆さん！うち続く悪性インフレのさ中に口火を切って落された七四春闘は、日本全国の戦闘的労働者の固い結束により三月末一大昂揚を迎えんとしています。

下部労働者の戦闘化にもかかわらず、社共指導部は「国民春闘」と銘打って秩序あるゼネスト、管理ストを叫び、戦闘化する下部労働者を押え込まんとしています。平均賃金制の提起や年金の提起は、夏の参議員選の票田を獲得する為のアメでしかないのです。

こうした社共指導部の裏切りの中で三月一日、国鉄労働者は三月決戦の突破口を切り開くべくストに突入しました。昨年末闘争で闘われた年度末手当に結着をつけスト権奪還を獲得すべく二十四時間ストに突入したのでした。年度末手当をインフレ手当として支給し、年度末手当の増額を拒否する政府ブルジョアジーは、スト権についても正常な労使関係ができれば認めるとして国鉄労働者の闘いに真向うから敵対したのでした。

一方、社共既成指導部による裏切りは、管理ストと称し中央トップ交渉をボス交的に行い、戦闘的にゼネストを貫徹する労働者をケン制したり、あるいは日教組にあっては、地方から大挙、高校受験に上京する受験生を上野駅から組合の車で受験校に送迎しようと提起し、政府ブルジョアジーによる「秩序が乱れる」なる恫喝に屈服し、二十四時間ストに真向うから敵対せんとしたのでした。

社共による下部労働者の戦闘化に対する押え込みの中で闘われんとした三・一ゼネストに対し、二月末結成された西部地区春闘共同闘争委は、断固とした支援闘争を展開してきました。

二月二十八日夜、各職場で社共に抗し戦闘的に闘い抜いている西部地区内の労働者が結集し、七四春闘をめぐる情勢の中で三・一スト支援の意義を確認し意志統一を行っていきました。

闘争に先立つこの意志統一に於て、事務局長から、この西部地区春闘共同闘争委は職場闘争を媒介として地区的結合を遂げ共同闘争を行ってゆく為に結成されたこと、そして七四春闘をめぐる情況が社共の裏切りの中で今一歩大型化し戦闘化しえないでおり、わたしたちは三・一スト支援を社共の国民春闘の犯罪性を暴露し下部労働者との固い連帯を行ってゆかなくてはならないと提起があり、万場の拍手で確認し、翌朝の行動に備えた諸準備と仮眠についてゆきました。

翌三月一日早朝五時半新宿駅南口に三十余名の労働者が結集し、「春闘勝利！ゼネスト貫徹！」の呼号の下、断固とした支援闘争を展開していきました。新宿駅南口から国労新宿、客貨車分会前までの戦闘的デモンストレーションを貫徹した労働者達は、客貨車分会の国労労働者との交流を行なっていきました。

二月二十八日から徹夜で闘い抜いている二十余名の戦闘的国鉄労働者は、三・一ストの性格や形態を説明し、今回の場合は客貨車をはじめとする三部門のスト突入により全面的交通マヒを引き起こしており、処分も辞さないで闘い抜くという決意表明を行なっていきました。これに対し西部地区内の労働者から、七四春闘に対し国鉄労働者は、最下層労働者の利害（下請工、部落民）を同時に守る闘いとして、断固としたゼネスト決起のうちに闘い抜いてゆかなければならないという積極的提起が行われていきました。この他、「順法闘争」が実は唯一合法的な運転であるとか、給料に関する事など、一時間余り交流し、檄を渡し、力強いシュプレヒコールをあげ交流を終えてゆきました。

国鉄労働者との交流ー連帯の後、新宿駅西口まで戦闘的デモンストレーションを貫徹し、新宿駅頭での圧倒的情宣に入っていきました。

熱気あふれる情宣に、駅前をゆきかう労働者は「頑張れよ！」と呼応し、足を止めビラに見入り、多くの労働者との連帯がかちとられてゆきました。情宣後駅頭で総括集会を開催し、七四春闘をゼネスト決起として田中政府を追いつめる闘いとして貫徹することが確認され、各労働者は職場の闘いにと決起してゆきました。

全国の労働者の皆さん！友人の皆さん！

大型化がさわがれた七四春闘は、諸階級階層の広範な決起にもかかわらず、田中（帝国主義）政府を追いつめてゆく戦闘性が十分に造り出していません。それというのも、社共既成労働運動指導部が、各個撃破の個別接衝で問題の解決を図ろうとしたり、戦闘化する下部労働者に「整然たる秩序あるストを」と呼びかけ戦闘的エネルギーの封殺にやっ気になっているからです。六〇年安保時に「国会に整然と向かおう」として労働者を裏切った事が今また「国民春闘」の仮面の下参議員選を目標とするが為に行われているのです。

わたしたちは社共のこうした裏切りを絶対に許してはなりません。七四春闘を、社共に抗し日本帝国主義を打倒してゆく闘いとして闘い抜く事が問われているのです。

日共＝高山一派による「正常化連」デッチあげを粉砕す！

全国の労働者、学生、市民の皆さん！

部落解放の敵対者日共は、二月二十五日東京において、部落解放同盟の分裂組織「正常化連」をデッチあげんと策動しました。

しかしながら、狭山差別裁判糾弾闘争を中軸として飛躍をとげている東京都連と、その闘いを支援する多くの闘う部分との共同の力は、かかる日共の策動を粉微塵にうち砕き、部落解放闘争の地平を更に確固としたものとしたのです。京都における文化厚生会館問題以降、部落解放同盟に敵対してきた日共は、「解放同盟は暴力集団である」というデマ宣伝を行いつつ、全国的に分裂組織「正常化連」造りを行い、東京においても、日共党中央の肝いりで「正常化」造りを行なわんとしたのです。

われわれは、かかる日共「正常化連」が、部落解放闘争をねじまげんとするもの以外の何ものでもないことを明らかにしていかねばなりません。

しかしながら、かかる公然たる敵対の開始は又、日共＝高山一派の一層の窮迫の表われであり、最後のあがきでもあるのです。それ故にわれわれは、この間の日共高山一派との対決を更に強化し、最後のあがきを葬り去ってやらねばならないのです。

日共＝高山一派は、この間東京における部落解放闘争の低滞を良いことに部落解放同盟に巣喰ってきたのです。そして高山一派は、運動がないが故に日夜呻吟していた部落大衆を無視し、自からの小ブルジョア的、反人民的利害をのみ追求するという堕落を露呈していたのです。

そしてそればかりか「革新」ミノベとの熾烈な闘いの中で勝ち取られた行政闘争に敵対し、さらにはミノベとの癒着のあまり、都の社会教育研修会での差別事件を「差別ではない」と言い張り、正当な糾弾闘争を「行政への不当な介入であるとさえ言い切り、部落解放闘争への敵対を強めているのです。

解放教育行政を積極的に推進せねばならないはずの都の教育庁の中で、「差別される方に問題がある」「埋立地に住宅を建て移住させろ」「部落民はいとこだ」等という差別発言が公然とまかり通り、かかる差別的言辞を部落解放闘争の闘士であるべき高山が容認し、それを握り潰すことさえやってのけたのです。

以上で明らかなように、日共ー高山一派は部落解放闘争をねじまげ反人民的な活動にその全てを注ぎ込んでいたのです。

当然にも、かかる所業に対して、主体的な高まりを見せてきた部落大衆の中から批判が起こり、高山一派は大衆的支持を喪失し、昨年九月三日の都連大会において、弾劾の中で高山は副委員長の座を追われることになったのです。

同盟から放逐された高山一派は孤立し、孤立すればする程に反人民性を深化し、露骨な「正常化連」策動を開始し、一月二十七日「橋のない川」上映、二月二日「正常化連」総決起集会なるものを行なわんとしましたが、その全てがわれわれの闘いの中で破産し、とりわけ二月二日に到っては、抗議・糾弾の闘いに立ちあがった東京都連を中心とする部隊に対して、権力＝機動隊をさし向け、テローリンチをさえかけてきたのです。

権力の庇護の下に集会を行うという「正常化連」の正体は、さらに部落大衆の中に明らかにされ、日共＝高山一派は地域における足をすべて奪られ、日共系労組等を含む「民主団体」に泣きつき、何とか「正常化」を形ばかりでもつくりあげんとしたのです。

それ故に二月二十五日は、日共＝高山一派の最後の生命線としてあり、民青、地区民等を大量に動員し、集会を行なわんとしたのです。

しかしながら、かかる日共＝高山一派の最後の目論見は、早朝から開始された圧倒的な情宣活動によってすでに破産してしまったのです。

正常化連糾弾総決起集会

解放行政をめぐって闘かわれている中で、日共＝高山一派が、日共の都職労労働者、教育労働者を動員し、排外主義的にうち固めつつ「正常化」の中に組み入れんとしていることに対して、解放同盟は、東京都庁を始めとした全ての区役所に数万枚にもおよぶビラ入れを貫徹し、「正常化連」粉砕を大きくうち出していったのです。

そして、午後からは多くの支援団体をも含めた闘いが開始され、会場である労音会館の全ての出入り口を防ぎ、機動隊の暴行二名の不当逮捕にも屈することなく、圧倒的な座りこみを貫徹していき、結局、会場へはだれ一人として入ることができずに、一握りの高山一派によるショボショボとした集会が行なわれたのに過ぎなかったのです。

われわれは以上のように、高山一派が、少しの大衆的支持もなくかかる策動を行なっているのであり、かかる敵対・分裂を絶対に許してはならないのです。

全ての同志の皆さん！わたしたちは日共のこのような策動を決して許してはなりません。全国における日共＝「正常化連」策動を絶対に許すことなく、部落解放闘争の革命的水路を切り開くために闘い抜かなければならないのです。

3・4本山支援・営業所抗議の闘いに圧倒的に決起

三月四日、全金本山支援、東京営業所抗議闘争が、東京芝公園に、全都一千余名の圧倒的結集をもってかちとられました。

全金本山の闘いは、現在本山資本による"別棟分離就労"という欺瞞的ロックアウト解除に対し、あくまでも労組員全員の原職復帰を要求し闘い抜かれてきました。とりわけ昨年来の「第二組合」ー宮城県警機動隊との実力対決をもっての実力就労闘争の展開は、本山闘争の全国的支援闘争との結合を拡大し、戦闘的労働運動の一大結節環となっています。

全国的支援闘争を担う本山闘争支援連帯委員会の下に開催されたこの集会は、全金本山支援を軸に、各地の職場で資本ー権力との実力的対決を強め、七四春闘を、社共の改良主義、議会主義を突破し、ゼネスト貫徹をもって田中（帝国主義）政府打倒へ進撃せんとする多くの戦闘的・革命的労働者を結集して闘いとられました。

集会は光文社共闘、平和台病院、東水労、電通、東交等、各職場での戦闘的闘いを構築している職場労働者からの連帯と決意表明、そして七四春闘の政治的勝利を克ちとるべく、地域的共闘を樹立して闘う西部・北部・南部春闘共闘闘争委員会からの闘いの決意をうけ、七四春闘勝利の闘いを全金本山の戦闘的労働者との連帯の下にかちとっていくことが強く訴えられました。

とりわけ、三月一七ー一八の全国支援闘争への圧倒的な結集の決意の表明は、今日の民同労働運動の「雇い主との関係」の枠内での、労使協調に基く「モノ取り」運動を大きく突破した階級的、戦闘的労働者の闘いが広範に形成されていることをはっきりと示しています。

集会後、三・一七本山現地闘争を固く決意した全ての戦闘的労働者は、本山東京営業所への断固たる抗議の一大デモンストレーションを、機動隊の暴力規制を実力ではねかえしつつかちとりました。

春闘—参院選勝利

2・22三里塚、戸村氏連帯東京集会圧倒的にかちとる

二月二十二日、品川公会堂において、「春闘ー参院選勝利、三里塚闘争と戸村一作氏に連帯する東京集会」が、千五百名の大結集をもって克ちとられました。

今回の東京集会は、七四春闘を闘い抜いている労働者と、地域住民、農民、学生の一大結集をもって、三里塚闘争ー春闘ー参院選を、大衆的実力闘争で一体的に打ち抜き、日帝田中を更に追い詰める今春期一大決戦の昂揚をかちとる重大な意義を有した闘いとしてあったのです。

発言に立った戸村一作氏は、明確に、「三里塚は全国住民運動の最先頭に立つ。現地実力闘争だけでなく全国の先頭に立つ。」と訴え、八年余の三里塚闘争の突き出してきた革命的闘いを更に全国に押し広げ、議会をも戦場として闘う熱烈な決意に集会参会者の圧倒的な連帯と支持の拍手が送られました。

更に「連帯する会」の呼びかけ人である三菱長崎造船労組の西村卓司氏、文化人の針生一郎氏の発言と講演をうけ、最後に中央連対事務局からの経過報告、三里塚芝山連合空港反対同盟よりの決意表明をもって、熱気に満ちた集会を終えていきました。

七四春闘が三・一統一ストを結節点に、日帝ブルジョアジーの「秩序ある春闘」、民同の「破局なき春闘」という労使協調、早期妥結の願望を打ち砕きつつ、ゼネスト春闘ー政治決戦への一大昂揚をかちとらんとしている中にあって、革命的労働者の闘いが三里塚、本山、狭山を結節環とした、真に日帝の侵略反革命と対決する階級的・戦闘的闘いは増々重要な課題となっています。

三里塚闘争と連帯し、七四春闘の勝利的展開を更に六月参院選勝利へと打ち抜くことは、社共のブルジョア議会主義に対する革命的議会主義の復権として決定的な意義を有しています。

しかし、今集会において、明らかとなったように、叛旗派等はこの闘いに対する敵対を露骨にしています。彼らは、三里塚闘争そのものを社会革命主義的に見てとり反対同盟農民の戦線を「国家幻想を越えた地域共同体」として意味付与し、共同体的結合そのものに「価値」を見い出してきたのです。つまり、現実に闘いとるべき課題（空港建設、開港阻止、田中政府ー日帝打倒）の実現＝対象の具体的変革を欠落させ、観念的「思惟」のあれこれに「価値」を求め、そのような「価値ある意識の共同性」を三里塚闘争に求めてきたのです。

従って、三里塚闘争の政治的発展が、三里塚現地の「共同体的空間」を越え、全国の住民闘争、職場闘争と結合し、更に「議会をも戦場とする」参院選への決起をかちとろうとしている中にあって、彼らの「幻想の三里塚」は決定的破産を迫られたといえます。

わたし達は、こうした部分が、三里塚闘争の全人民的政治闘争としての実体的構築に敵対し、地域個別闘争に陥し込めるサンディカリズムでしかないことをはっきりと見てとるのでなければなりません。二・二二東京集会の圧倒的成功をバネに、三里塚ー本山ー狭山の全人民的結合を打ち固め、全国住民・農民闘争、狭山差別裁判糾弾闘争、アジア人民の反日帝闘争の大合流をもって七四春闘勝利ー参院選勝利を闘い抜こう。

3・3筑波大入試粉砕闘争闘わる！

去る三月三日、筑波大学入試強行に対して、全都筑波共闘をはじめとする四団体によって断固たる粉砕行動が闘われました。

昨年九月、筑波法の強行採決を許してしまった学生運動の脆弱性を克服し、学生にかけられた帝国主義による攻撃との対決の必要性が叫ばれてきたことは、画期的な意義をもつものとして評価されなければならないでしょう。

その意味で、三・三筑波大入試粉砕行動への広範な学生の決起は、筑波ー新大管法攻撃を粉砕するための一つの布石、一つの突破口として勝ちとられたということができます。

筑波体制は大学管理支配の全面的な強化によって闘う学生を圧殺し、中教審ー産学協同路線の導入を計り、アジアへ向けた侵略反革命と、その体制の中に大学と学生を動員していかんとする策動です。

今年に入り、既に静岡、宮崎、滋賀県などに単科医科大の設置や、教員養成大学、放送大学などが「新構想大学」「筑波型」大学として矢継ぎ早に打ちだされていることや、全国大学の一四〇校を上回る学費値上げ攻撃、「自主改革」に名を借りた「参与法」「副学長」制度の導入などが、一挙的かつ全面的に実現されようとしているのも、筑波体制による大学支配が日帝にとって火急の決定的で重大な任務としてあることを意味しているのです。

そしてそれは、日本の闘う学生にとってもこの筑波体制との対決が重大な任務であることをはっきりと示しているのです。

筑波大開校阻止闘争の実現は、こうした日本学生運動の極めて重大な任務をもっているのです。

学費値上げ攻撃や、学内管理支配の強化攻撃に対して闘い抜かれてきた学園における闘いを統一し、全国の闘う学生の団結によって闘いを勝ちとること。そしてそのことによって学校当局による反動的な筑波ー新大管法の先取り、中教審の実質化攻撃を打ち砕き、新大管法攻撃への決定的な痛打をあたえることが、この闘いの実現の中に目指されていくのでなければなりません。

まさに、かかる筑波大開校阻止の実現に向けた闘いとして、三・三筑波大入試粉砕闘争の意義を見てとることができるでしょう。

それはまず第一に、この闘いには全都筑波共闘をはじめとする広範な学生の決起を勝ちとることによって、「筑波大開校阻止」がますます全国学生の課題として鮮明なものへと高められてきたことです。

ガス銃までもち出して弾圧せんとした機動隊を尻目に、入試粉砕に決起した学友は、最後の一枚までビラをまきつづけ、「検挙するぞ」「ブンなぐれ」とわめきちらす機動隊の恫喝をはねのけ、大塚公園までのデモを断固として貫徹したのです。

そして第二に、闘争参加者全員が、四月二五日にせまった筑波大開校（入学式）阻止に向けて固い意志統一を勝ち取ったことです。

四・二五筑波大開校阻止の闘いは、全国学生の決起によって土浦市内を炎の海と化すものとして実現されるでしょう。学生運動の断固たる怒濤の如き進撃によっていよいよ四月決戦をむかえようとしているのです。

3・10防衛医大開校阻止 現地調査をかちとれ

友人の皆さん！労働者の皆さん！

七四春闘が戦闘的労働者による職場末端からのゼネスト決起のうちに日毎に闘いの気運が盛り上っています。しかし労働者総ぐるみでの七四春闘への闘いの姿勢は、盛り上りにもかかわらず既成野党指導部による各資本との個別接衝のうちに押え込まれ、これに抗し戦闘的に闘わんとする者には「統一と団結」の名の下徹底した恫喝が加えられ指導部による闘いの鎮静化が続出しています。社共指導部は、七四春闘で危機にあえぐ田中（帝国主義）政府をゆさぶり打倒してゆく闘いを放棄し、一定の賃上げ獲得をもって参議員選の票田を獲得しようとし裏切りと敵対を深めているのです。

こうした既成野党指導部の裏切りの中で、わたしたちは七四春闘を、田中（帝国主義）政府を追いつめ打倒してゆく闘いとして徹底したゼネスト貫徹のうちに闘ってゆかなくてはなりません。そして田中（帝国主義）政府を追いつめ打倒してゆくには、インフレ下でしわ寄せが集中している臨時工、社外工、季節工、部落民、在日中朝人民への抑圧の強化や差別強化と対決してゆく事です。同様に、支配者階級の延命の途である軍事外交路線やそれに基づく産軍学複合体制との対決を七四春闘の中で組織してゆく事が問われているのです。

自民党内外・国内外のゆさぶりに遭い危機にあえぐ田中（帝国主義）政府を打倒してゆく戦いこそ七四春闘を闘うに当ってわたしたちに問われていることであり、そのためには田中（帝国主義）政府の生命線＝アジア侵略反革命と侵略反革命体制造りと対決してゆかなければなりません。とりわけ田中（帝国主義）政府が延命せんとアジア侵略反革命を遂行してゆこうとし、自衛隊の帝国主義軍隊化を図ったり、軍事医学の研究開発、従軍医師の育成を図らんとすることに対し戦い抜いてゆかなければなりません。

田中（帝国主義）政府はインフレであり余る通貨を、軍事産業や軍事施設に投資することで吸収し、あわせて反革命的な突撃体制を造ろうとしています。四十九年度防衛予算を、一兆九千億円と組み世界第七位の防衛力を造ろうとしています。そして二億円にものぼる金をつぎ込んで自衛隊を実戦能力のある帝国主義軍隊として強化しようとする田中政府は、同時に、隊員と共に戦地に向い戦いながら傷を負った兵士を治療する従軍医師を、防衛庁の付属機関として防衛医科大学校を開校し、育成しようとしています。

七〇年以降、数多くの反対運動が展開されたにもかかわらず、この防衛医大設置は、昨七三年九月、四次防の一環として防衛二法案に組み入れられ強行採択されたのでした。すでに昨年末と今春一月に試験が行われ、初代校長（松林久吉）も決まり四月開校が急がれているのです。

この防衛庁付属機関として開校される防衛医科大学校は、自衛隊医官の不足を抜本的に解決するために設置する（七二・三月防衛医科大学校設置の大綱）と言われ、部隊と共に行動する従軍医師の充足率が十二・二％で充足率が低いのに対し、防衛庁自らが部隊医官を自家養成せんとするものなのです。

この為、医大を受験する学生に、身長・体重・胸囲等採用時の合格基準が設けられたり、合格後の教育過程では、進学課程二年、専門課程四年、研究課程の他に、訓練過程という自衛官として必要な基礎的訓練が課せられていたりしています。

特に学生の処遇については目を見張る必要があります。医大生の身分は防衛庁定員外職員であるとされ、在学中は、参考書、教科書が貸与される他、全寮制の三食付で二万九千二百円の月給が支給され年に三回はボーナスが給与されることになっています。そして卒業生は、卒後九年間、自衛隊員として勤続する義務が負わされており、九年間とされた理由が「自衛隊内の医官不足が三佐以下に顕著で、三佐の初任時までの期間が通常九年である」とされているのです。明らかにこの教育体系や卒後の体制は、従軍医師の養成を目的にしているのです。授業料他がタダという事の裏に九年間の従軍義務が与えられ、四次防により実戦部隊化する自衛隊と共に、アジア侵略反革命に動員せんとしているのです。

又、この防衛医大では、近代戦に見合う兵器の研究開発がBCR兵器（細菌兵器、化学兵器、放射線兵器）の開発として行われようとしています。すでにかつて中国人民に対し、コレラ菌をバラまき中国人民を殺りくし、もって日本の侵略を行おうとした旧七三一部隊が、医大の教官として派遣される事が決定しています。更に、四月開校をひかえ、動物実験病棟を建設したり、付属病院を生体実験の場にすることが画策され、軍事医学の研究開発の体制が造られつつあります。

更に、付属病院を市民に解放し、国民管理・徴兵制へ向けた住民健康データの基礎資料が、サンプル造りとして目指されています。医療過疎といわれる所沢に、病院開放をもって市民を懐柔しつつ、反革命的な地域治安管理網を強化しようというのです。

友人の皆さん！所沢の米軍基地跡に校舎を建設し開校させようとしている防衛医科大学校は、入間基地施設を当面借りることで四月開校せんとしています。

病院開放で懐柔され、沈滞している所沢市民の戦いは、四月開校阻止に向け今又、戦列を拡大しようとしています。わたしたちは、七四春闘で賃上げのみに決して目を奪われることなく、防衛医大四月開校阻止！医大への教官派遣阻止の戦いを闘い抜いてゆかなくてはなりません。そうした戦いの一環として、三月十日所沢現地を調査し実態を把握してゆきたいと思います。全ての仲間達！田中（帝国主義）政府打倒・日帝のアジア侵略反革命粉砕の下、七四春闘で四月医大開校阻止を戦おう！

5・29外務省突入戦士へ 実刑判決

去る二月二十一日、東京地裁刑事第四部柳瀬裁判長係りにおいて、七一年五・二九、沖縄返還協定調印阻止、外務省突入闘争五戦士に対する判決公判が行なわれました。

反動木梨裁判長より引き継いだ柳瀬裁判長は、外務省突入五戦士に対し、塩谷喜三男君に一年八ケ月の実刑、藤村・金沢・江木君に各々一年八ケ月、執行猶予四年、伊達ひとみさんに一年六ケ月、執行猶予四年の有罪判決を下しました。

五・二九外務省突入闘争は、七一年六月、日米両帝国主義による沖縄返還協定調印に対する最も先鋭的な闘いとして、日帝政府中枢ー外務省への「返還粉砕！」の直接攻撃として勝ちとられたものです。戦後二十数年間の米軍政支配の下で、土地を奪われ、生活する権利をも簒奪されてきた沖縄人民に対し、日帝への施政権返還によって、更に、日米共同軍事体制の強化と、日帝資本の下への反革命的統合を内実とした「沖縄返還協定」調印の策動に対し、すでに当時、五・一九には沖縄全島での返還粉砕ゼネストが闘いとられていく中にあって、この五・二九外務省突入は、沖縄人民の革命的決起に応え、日帝足下からの反撃として重大な意義を有した闘いであったといえます。

しかも、この沖縄返還粉砕の闘いは、七二年五・一五以降、全軍労を始めとする沖縄人労働者の解雇合理化攻撃、本土への不安定で差別された大量の臨時工・下請工への就労、「海洋博」による本土企業の土地買占め、自然破壊、高物価。更には「韓」国人民の反朴闘争の昂揚に対し、「非常警戒体制」をもって臨戦体制をとり、演習、弾薬輸送の増大で緊迫する日米軍事体制の脅威が全島を蔽っていることにはっきりと示されるように、「沖縄返還」の反人民性は明白な事実となっており、返還粉砕の闘いの正当性を具体的に明らかとしています。

こうした状況の中で、五・二九公判は、その闘いの革命性を守り抜くべく、五・三〇、六・一五、一七の調印阻止闘争統一被告団の固い結合の下で、検察ー裁判所の分離公判ー早期結審策動と対決し闘い抜かれてきました。

柳瀬裁判長の判決が、この沖縄返還協定調印を巡る問題について全く触れることなく、暴力事犯として機械的に処理してきたことの中に、わたくし達は日帝権力の「沖縄返還」＝「民族の悲願」なる大義名分の破産をはっきりと見てとることができます。

同時に、今回の五戦士への実刑攻撃は、日帝権力ー裁判所による五・二九戦士の革命的闘いに対する報復であり、現在の日帝がアジア侵略反革命の必死の延命策動の遂行を目論む中にあって、五・一五侵略反革命体制に対する沖縄人民、本土の革命的プロレタリアートによる階級的闘いの前進が、七四春闘を結節環として克ちとられようとしていることに対する反革命弾圧に他なりません。

わたし達は五・二九闘争を頂点とする沖縄返還粉砕闘争の獲得したプロレタリア国際主義と日帝の侵略反革命との革命的対決の地平を更に現下の日帝のアジア侵略反革命の実力打破の闘いへとひきついでいくのでなければならないといえます。

（一面より）

よるボス交で収束させる方向性として表われる事は必至であり、われわれはかかる社共の改良主義、議会主義を決して許す事なく、戦闘的に闘い抜くのでなければならない。

われわれは、社共のごとく、悪性インフレに対してはインフレ解消の為の民主的規制、生活破壊に対しては生活防衛と、本工労働者の階層的利害を守る闘いのみとして闘うのでなく、生活破壊の根拠たる日帝のアジア侵略反革命と対決しあらゆる被抑圧民族人民の利害を徹底して守りぬく全人民的政治闘争の一大高揚として七四春闘を闘い抜くのでなければならない。

社共をはじめとした既成労働運動指導部の改良主義、議会主義、排外主義への転落に抗し、ブルジョアジーとの大衆的実力闘争として全金本山闘争は恒常的な機動隊、ガードマン、第二組合と実力就労の闘いを永続化せんとしているのである。

われわれは国家権力ー本山資本一体となった暴力的組織破壊攻撃を決して許さず、三年間の長期にわたり「原職復帰」を掲げて闘い抜いている全金本山労働者との熱い連帯を勝ち取るべく、三月十七日仙台現地へ結集し、現地全国集会を圧倒的に成功させ、文字通り全金本山の戦闘的実力闘争の炎を全国生産点職場に拡大しようではないか。

そして又、現在、部落解放闘争の頂点的課題としての狭山闘争は、今春期における全人民の重要な闘いとして一大高揚を迎えている。

とりわけ三月二三日狭山公判においては、控訴審闘争の方向性を決定する「証拠決定」が急がれんとしているのであり、われわれは「六つの証拠を全面採用せよ」「検察側の隠し持っている全証拠を開示せよ」を掲げ、石川一雄君、部落解放同盟との固い連帯の下、全国から総決起し、日帝田中ー高裁寺尾に痛打を浴びせ、狭山差別裁判糾弾、石川一雄氏の即時奪還を何が何でも勝ち取ろうではないか。

検事は、二・七公判において、石川青年が犯人であるとの予断と偏見の下に

㈠脅迫状の訂正個所がインキでなくボールペンでなされているという原判決の誤りは認めるが、この程度の誤りは判決に支障はない。

㈡出会い地点について、中田善枝はようやく十六才の乙女で情緒不安定で、逃げるに逃げられず、「ヘビににらまれたカエルのごとく」石川氏についていった。

㈢玉石については、それはなんの変哲もない石塊である。（しかし、玉石と名づけたのは警察である）

㈣踏み固めれば残土は残らない。（検察側は中に死体がある事を故意におとしているのである）

と客観的事実にもとづかない全く主観的な判断を繰り返し述べたのである。

そして、カバン、万年筆、時計なるものが全くデッチ上げ証拠である事については、積極的に反論できなかったのである。

われわれは、事実を捏造し、ニセの自白を唯一の根拠に、石川氏を有罪ー死刑にする事によって、部落差別を助長、拡大し、人民分断支配の強化をもって、自らの帝国主義支配体制の危機を乗り切らんとする日帝田中ー高裁寺尾の策動を決して許す事は出来ない。

三・二三狭山公判闘争の意義は、第一に石川氏即時奪還を日帝田中ー高裁寺尾につきつけ、十一年間の長期に亘り獄中弾圧を余儀なくされている石川氏を、何としても両親とわれわれのもとに奪還してゆかねばならない闘いとしてあることである。

そして第二に、石川氏は無実であり、狭山裁判は差別裁判である事を満天下に示し、狭山公判闘争勝利、部落完全解放ープロ独樹立の大道を歩まねばならない。

まさに「無実、差別」を前提にしてはじめて狭山闘争の勝利は勝ち取られるのであり、この事の実現の為、われわれはまず、「有罪」を前提として日共系弁護団によって書かれた控訴趣意書の全面撤回を勝ち取るのでなければならないのである。

第三に、三・二三公判において、石川氏が無実である事を決定づける「六つの証拠」の採用を何としても認めさせる闘いとして貫徹しなければならないのである。

そして第四に、狭山闘争の革命的方向性をねじ曲げてきた日共、カクマルの敵対を許さず闘い抜くのでなければならない。

矢田教育差別事件、差別映画「橋のない川」上映運動等、一貫して自らの党派利害の為にのみ政治利用主義的に部落解放闘争にかかわり、部落差別を助長、拡大する役割しか果してこなかった日本共産党は二月二十五日、日共正常化連デッチ上げ大会を画策した。

この大会が部落大衆をはじめとした労働者人民により粉砕された事はもちろんであるが、われわれはかかる日共の部落解放闘争における政治利用主義、セクト主義、排外主義を断固として粉砕しなければならない。

又、動労の仮面をかぶって登場するカクマルの反革命的敵対をわれわれは決して許すことはできない。

カクマルは、この間、部落解放闘争に対して「小ブルジョアの闘い」であると主張し、一切無視し、敵対してきたのであるが、総評が狭山闘争への参加を決めるや、今度は何の総括もなく、全く政治利用主義的に部落解放闘争へかかわらんとしているのである。

彼等は、部落解放闘争を階級闘争の一環に位置づけ闘い抜く事が出来ないが故に、狭山闘争を「小ブル雑派解体の闘い」であり、「逃げ込みを許さない」闘いとして、自らの党派利害によってしか部落解放闘争を位置づけえないのである。

われわれは、彼等の純プロ主義、社共の左翼的補完物としての排外主義への転落を決して許さず闘い抜くのでなければならない。

全国の革命的労働者、学生諸君！三・二三狭山公判闘争を文字通り石川青年即時奪還、狭山差別裁判糾弾、部落完全解放、日帝田中を追撃し打倒する全人民的政治闘争として闘い抜こうではないか！

二・二三全国労共闘春闘総決起集会の圧倒的成功を打ち固め、アジア、アラブ人民と連帯し、日帝の侵略反革命粉砕！田中（帝国主義）政府打倒！社共の排外主義、改良主義、議会主義を許さず、インフレと生活破壊に抗し、七四春闘の圧倒的勝利を勝ち取ろうではないか！

七四春闘の革命的大爆発をめざして、三・一七全金本山現地ー三・二三狭山公判闘争に総結集せよ！

アジア人民の反日闘争と連帯し、日帝のアジア侵略反革命粉砕！田中（帝国主義）政府打倒！七四春闘勝利の水路を切り拓け！

足立商会派のカクマル主義 セクト主義、排外主義を許すな

全国の労働者、学生、戦旗読者の皆さん！朝鮮人民、アジア人民は帝国主義と反革命軍事政権に対して三月決起を闘いとろうとしています。私達はこのような闘いと固く結合して、今七四春闘を、日帝のアジア侵略反革命粉砕、田中（帝国主義）政府打倒へ向けて闘い抜かなければなりません。

とりわけ、社共人民戦線派ー既成労働運動指導部が「破局なき改革」だとかいって、闘いを改良主義、ものとり主義へと歪曲し、帝国主義に屈服させようと、戦闘的労働者人民に対して統制を強めている現在、私達の任務は決定的に重要です。

私達は全金本山闘争、沖大社闘争を頂点として闘い抜いている戦闘的労働者人民、自らの解放をかけて闘っている部落民、沖縄人、朝鮮人民と革命的に連帯し、田中（帝国主義）政府打倒を勝ち取ることが問われています。

このような闘いに敵対するのは権力、社共、カクマルだけです。とりわけカクマルは、帝国主義と闘うのではなく、戦闘的労働者人民、革命的左翼と闘うことを自己の任務としており、それが階級闘争であると思っているのです。私達はこのような部分を許すことなく、帝国主義者とともに階級闘争の藻屑としてやらねばなりません。

ところが全ての兄弟達！七四春闘のこの重大な局面に於て第二のカクマルとして自己を登場させ、権力との闘いを回避して延命しようとしている諸君がいるのです。それがあの足立商会派に他なりません。

私達は足立商会派のカクマル主義、セクト主義、排外主義的対応の数々をここで暴露し、日本階級闘争への敵対を糾弾します。

㈠、三・三闘争に見られる足立商会派のカクマル主義的対応

三・三闘争は、朝鮮人民の三・一独立蜂起五十五周年を記念し、現在反朴・反日帝闘争を闘っている朝鮮人民と連帯して、日帝の侵略反革命を粉砕する闘いとして、すぐれて国際主義的で且つ重要な闘いとして設定されていました。

闘いは沖共闘を中心とした実行委員会で準備されていたわけですが、足立商会派はこれまで自分達が否定して来た革命的労働運動の推進主体である全国労共闘を突如として名乗り始めたのです。そして三・三当日は三十数名の全国動員部隊で〇〇派解体を呼号し、私達の三・三闘争への大衆的登場を暴力的に阻止したのです。

私達は、現在の日本階級闘争にとって必要なことは、歪少で無意味な内ゲバを際限もなく繰り返すことではなく、日帝の侵略反革命粉砕、田中（帝国主義）政府打倒へ向けて闘い、革命的な団結を形成することであると確認しているが故に、断固とした単独闘争を貫徹し抜いたのです。

足立商会派の三・三に見られるかかる対応は、さかのぼれば昨年十・二一、十二・二〇、二・二六にも見られるー全く大衆運動の原則を逸脱したセクト主義、内ゲバ主義以外の何ものでもありません。

私達が朝鮮人民と連帯する闘い、日本ー国際階級闘争に対してどのような反革命的、反人民的行為を働いたというのでしょうか。

彼等足立商会派は、そのような事等何の関係もなく、ただただ分派利害を大衆闘争の中に持ち込んでいるだけなのです。分派闘争を階級闘争に置きかえようとしているのです。私達はカクマルに対して一貫して「権力と闘わず、他党派解体の為に闘う」といって批判してきたのではなかったでしょうか。

私達は足立商会派が第二のカクマルに転落してしまったことを確認すると同時に彼等のカクマル主義を徹底して糾弾しなければなりません。

特に足立商会派は、全国労共闘を名乗り始めることによって自らのカクマル主義・政治利用主義を自己暴露しています。

彼等は、私達の11CC路線の基軸であるところの革命的労働運動に対して、それを否定し組合運動を対置させてきました。そうであるが故に労共闘、高校共闘は必要ない、反帝戦線一本で行くんだと主張したのです。ところがどうでしょう彼等の右翼的組合主義的路線を何ら総括することなく、突如として全国労共闘が登場してきたわけです。これはもう、自己の路線に何ら責任を持たない、ただ内ゲバの口実にする為の、政治利用主義的な名称の詐称以外の何ものでもありません。

全国の兄弟達！私達は、このように分派闘争と階級闘争を等置し、その為にであればどのような利用主義的な政治でも打つという足立商会派のカクマル主義的対応を絶対に許してはなりません。

ただこのカクマル主義者達には本物のカクマルほど、その反革命性について評価してやることもありません。それは彼等のカクマル主義的対応が、ただただ自らが引き起こした事態（＝分派闘争）におびえるという恐怖心に基づいているからです。自分達から分派闘争を引き起こしたのだから、レーニン主義党である戦旗派は絶対に許さないだろうという邪推から生じている対応なのです。

私達はそのことをはっきりと確認しているが故に、そのような恐怖心からする分派闘争＝内ゲバは日本階級闘争にとって何ら有意義ではなく、むしろ、現在的に問われている日本帝国主義打倒へ向けての革命的統一にとって疎外物であると判断しています。

だから私達は、これまでも、またこれからも足立商会派に対して暴力的に対応することはないとしても、彼等のカクマル主義的対応に対して徹底的に批判し、糾弾していかなければなりません。

全国の労働者、学生、戦旗読者の皆さん！自らの分派利害を沖共闘や実行委での大衆運動に持ち込み、階級闘争を分派闘争に置きかえ、権力に対する闘いを弱める足立商会派のカクマル主義を許さず闘い抜こう！

㈡、デマやウソで固める足立商会派の排外主義者ぶり

㈠で足立商会の恐怖心に基づくカクマル主義的対応を見てきましたが、このような小心翼々たる部分は、私達に敵対するに当って、何ら正当な大衆的論理も持ち合せていないので、諸党派や、N・Rにデマをバラ撒き、ウソで固める以外の方法を持ち合せていないのです。革命的な綱領や政治組織路線を有していない足立商会派は、〇〇派解体で意志統一する意外にサークルとしてでも固めようがなく、そうであるが故に私達に対する排外主義的な「団結」を形成する為に自己の内外に渡ってデマをバラ撒きウソで固めることを唯一の活動としています。

彼等のデマとウソは数え上げたらきりがありませんが、ここに代表的なものを上げておきます。

①中央委員会多数派なる恥知らずなウソ、このウソは自らをボルシェヴィキに見せたい一身での一世一代限りの大ハッタリであったわけですが、以前「統一戦線」を組んでいた城山派（北海道地方委派）にさえもイチャモンをつけられ、三ヵ月ぶりにようやく出たニセ「戦旗」二号では、何の説明もなく、コソコソとおろされているという次第です。

革命党を自称する部分が、見栄やハッタリだけで名称を詐称したり、おろしたりすることが許されるのでしょうか。彼等にとっては革命運動などどうでも良く、ただ〇〇派解体へと何も知らない若い戦士達をダマスことが重要なのだと疑わざるを得ません。

②「〇〇派は必ずゲバルトをやる」という恐怖にかられたデマ宣伝。これこそ、足立商会派の排外主義的「団結」の形成にとって重要なデマ宣伝なのです。何の結集軸も持たない彼等にとって、必ずゲバられるという恐怖心をあおり立てることほど有効な方法は他にはありません。そして彼等は、闘争のたびごとに排外主義的意志統一をし、〇〇派解体の為にのみ武装して闘うのです。

しかしながら全ての兄弟達！私達が、この半年間の分派闘争の過程で彼等に対してゲバルトを仕かけたことがあるでしょうか。そんなこと等一度もなかったことを断言出来ます。例えば昨年十・二一や今年一・七闘争に於いて私達が圧倒的に多かった時（一・七闘争で足立商会派がたった六名）でさえも、私達は彼等を粉砕することをしなかったのです。

以上のような事実経過を見ても、私達の方からゲバルトをかけるということ等、全くのデマ宣伝に他なりません。

③全金本山闘争、青婦協運動を経済主義、純プロ主義と批判したという悪質きわまりないウソ。

私達は現在全金本山闘争を頂点とした戦闘的労働者人民の闘いに連帯すべく、未だ不充分ではありますが闘い抜いています。まさに今日の既成労働運動指導部が帝国主義者に屈服しようとしているのに対して、私達は、戦闘的労働者人民・被抑圧人民の革命的団結のもとに帝国主義の共同反革命（＝侵略反革命）とそれを内からささえる腐朽性に対決する革命的労働運動を展開してきました。このような闘いを実現するに当って、権力ー資本から攻撃され、既成労働運動指導部のしめつけに抗して、英雄的に闘っている労働者人民と連帯することなくしてその勝利はありません。

だからこそ私達が全金本山闘争、青婦協運動を経済主義、純プロ主義と批判した等というのは、悪意に満ちた誹謗中傷であり、私達が全金本山闘争、青婦協運動を闘っている戦闘的労働者人民と連帯するのを防害しようという反人民的なデマ宣伝以外の何ものでもありません。

私達が批判したのは、まさに彼等自身の政治組織路線の経済主義、純プロ主義なのです。足立商会派は自らの右翼性を隠蔽しようと私達からする批判が、さも彼等に対してではなく、本山闘争、青婦協運動そのものになされたのかの如く装おうとしているのです。

全国の兄弟達！このような排外主義的、政治利用主義的デマ宣伝が、日本階級闘争にとって利益になるのでしょうか。

④「〇〇派は沖共闘から抜けようとしている」という大衆操作。足立商会派は、私達が、歪少で意味のない内ゲバを回避し、沖共闘の革命的統一を克ち取るべく闘い抜いているのを良いことにして、私達がさも沖共闘から抜けようとしているかのようなデマ宣伝を行っています。しかもその理由が、私達が「沖共闘への参加は統一戦線主義だ」と言ったからだというのです。全く次から次へとウソが出てくるものです。ブルジョア政治家の資格がもらえようというもの。私達は、足立商会派が、党の中では分派闘争の自由を言い、統一戦線をその対象の政治内容を抜きにして革命勢力と意味付与して、その中では党派闘争禁止を言うという、全くの解党主義、統一戦線至上主義を批判したのであり、私達は沖共闘への参加そのものを批判してはいないのです。もちろん沖共闘から抜けるという宣伝など全くのペテンでしかないのです。

朝鮮人民と連帯し、3・3闘争に決起

③で紹介した足立商会派のデマ宣伝とも共通するわけですが、自分達に向けられた批判を、主体的に受けとめることなく、全て、大衆運動や統一戦線全体への批判であるかのようにスリかえ、自己の内外を排外主義的に固めてゆこうとする悪質な策動だということを確認しようではありませんか。

全国の兄弟達！ここで紹介した足立商会派のデマとウソはほんの一部でしかありませんが、もっとも中心的なものです。このような排外主義的なデマとウソは、彼等の分派利害（＝サークル的延命）の為にのみ必要であって、決して階級闘争の前進を展望したものではないのです。私達は、既に多くの脱落者を出している足立商会派にあっては、このような排外主義的「団結」もいずれ崩壊するだろうことを確信しつつも、かかる部分との断固たる闘いを押し進めようではありませんか。

㈢、戦旗派が陥った偏向や誤った対応を総括しない足立商会派

私達は、MUP問題やHBF問題にあらわれた、前衛ショウヴィニズムや共闘組織の戦略主義的分断を総括し、素直な自己批判を行ってきました。

ところが足立商会派は、私達に対して、自己批判するのはナンセンスだ、取り下げるべきだ、自分達は自己批判しない等と恐るべきことを言っているのです。足立商会派は一体何を考えているのでしょうか。既に闘う労働者人民にとって常識になっている、戦旗派の偏向や誤った対応に対して総括し自己批判するのが何故いけないのでしょうか。私達は自らの誤りを認め、その原因を切開することによってのみ、階級闘争の最先頭に立つことが出来ると考えてきました。

足立商会派が自己批判を否定するのは、二つの理由が考えられます。一つは、自己の過去を正当化したいが為であり、もう一つは私達に自己批判を撤回させ、戦旗派の責任を全て私達に押しつけ、大衆のような面をして私達を批判したいが為だと思われます。

全く、もってセクト主義丸出しではないでしょうか。階級闘争全体の発展や利益を考えるのではなく、自分達の位置を常に私達より有利なところに定め、延命することのみを考える本当に狭量な足立商会派ではありませんか。

戦旗派の過去の偏向や誤った対応を主体的に総括するのではなく、全てを私達におっかぶせ、延命しようという狭量なセクト主義であるが故に、三・三闘争における、あのようなカクマル主義的対応は必然なのであり、既に彼等の本質的性格になっているのです。

全国の労働者・学生・戦旗読者の皆さん！以上で明らかなように、足立商会派のカクマル主義、セクト主義・排外主義は、いまや彼らの本質的性格になっています。足立商会派は今後、単に私達に止らず、戦闘的労働者人民に対しても敵対してくるでしょう。私達は足立分派のこのような敵対を許さず、日帝のアジア侵略反革命粉砕！田中（帝国主義）政府打倒へ向け闘い抜かなくてはなりません。

戦線復帰宣言

清算ではなく、確固さと継承性の獲得を

大島健造

資本の更なる収奪に抗し闘い抜いているすべての兄弟に、一年にわたって不当拘留をはねのけ出獄を勝ちとったことを報告します。

国家権力はますます暴虐性を露骨にしてきており、私達被告団に対しても彼らにだけ理解できる理由をでっちあげて何度も保釈申請を却下しつづけてきましたが、現在なおも人質として数名に対して更に却下するという悪質な弾圧をおこなっています。冷えきった獄舎で健康をそこねている同志もおり、全く怒りにたえません。公判においても裁判所は徹底して検察側の立場に立っており、公安警察と同様の人民に対する弾圧の機関でしかないということを自ら公然としています。いまだ拘留されている同志を全力で奪還し、保安処分新設・刑法改悪策動と同時に進行している裁判所の反動化を打ち砕いていかねばなりません。

こうした弾圧の強化・人民の分断支配と、アジアへの「援助」という虚飾を使っての莫大な収奪は、腐りきった日本帝国主義の唯一の延命をかけた道としてあります。

私達はこれと徹底的に対決し闘い抜くなかから、分裂ではなく団結を、清算ではなく確固さと継承性の獲得を目指し、人民内部の矛盾の処理についても権力を利するのではなくあくまで権力に対し打撃を与える方向で組織していかねばなりません。

東南アジア人民の英雄的な解放闘争・反日闘争に応えきれる闘いを、この日本において創出しようではありませんか。私も皆さんとともに闘い抜く決意です。

日本帝国主義打倒！

セクト主義・教条主義を排し闘う

森幹雄

すべての戦う兄弟に、戦線復帰の挨拶を送ります。

昨年三月以来一年もの不当な長期拘留攻撃をかけてきた権力は、今もなお数名の同志を獄中に閉じ込め、田中帝国主義政府の革命的左翼に対する破防法弾圧を忠実に実行しています。刑法の改悪とあい伴って加速的に進行する司法の反動化は、革命的人民に対する露骨な意図を示しており、東南アジア侵略反革命、国内人民に対する搾取と差別・分断支配に自らの延命を求める彼らのなみなみならぬ決意を示しています。

現在破局的に進行するインフレの嵐は、資本家に莫大な利益をもたらし、労働者人民の生活を破壊しつくしており、広範な人民の怒りが今や爆発せんとしている中で、田中帝国主義政府は、ブルジョア支配の危機をがなりたて、反共宣伝と議会でのオシャベリで労働者人民を欺き、他方労働者人民内部に差別と分断を持ち込み、春闘に決起した労働者と革命的な左翼との革命的連帯を阻止せんと策動しています。

涌き起こる労働者人民の戦闘的エネルギーが、帝国主義を危機へと追いつめようとしている時、我々の任務は増々重大なものとなっています。労働者人民の利害と固く結びついた革命党の建設は火急の要であり、せまいセクト主義や教条主義は今や階級闘争にとって桎梏となりつつあります。革共同両派の内ゲバ至上主義は革命の未来、社会主義の理想とはまったく無関係であることは誰がみても明らかなことであります。帝国主義を打倒する為に、英雄的に闘いぬいている戦闘的労働者の闘いの中にこそ我々の未来があるのであり、差別され抑圧されながら、資本の鉄鎖をたゆまず断ち切ろうとしている、部落民や、在日中朝人民の闘いの中にこそ我々の確信が存在するのです。理論をもてあそび、空虚なスローガンをさけぶことは小ブル的な自己満足にしかすぎず、熾烈に展開される階級攻防の荒波の中では、一片の木の葉でしかありません。

すべての同志諸君。いかなる困難が行く手に待ちうけようとも、プロレタリア的利害を守りぬき、現実の豊富な闘いの中から革命的教訓をつかみとるならば、たとえ帝国主義者の反動の嵐がどのようなものであれ、我々は確実に革命に向って前進するに違いありません。

今春闘を突破口にして、反撃体制をととのえ、自己の持ち場につき、一致して帝国主義打倒の任務を推進しよう。

足立分派の分裂主義を排し、革命的労働運動の前進をかちとろう。

赤い走馬燈

五・二九外務省突入戦を恥しめる "雇われ左翼"への転落！

七一年五・二九外務省突入闘争は、わが同盟の「党としての闘い」の開始を万天下に示す画期的闘いとしてあった。それは当時、沖縄返還協定調印を六月に控え、沖縄人民の全島ゼネストの大昂揚が切り拓かれる中で、秀れて本土プロレタリアートのプロレタリア国際主義、暴力革命の烽火を打ちたて、加えて社共人民戦線派の雪崩打つ愛国主義、民族主義を打破する革命的闘いであった。

そして、この闘いを担った五戦士の何ものをも恐れぬ果敢な戦闘性と、二十三日間に亘る完全黙秘の不屈の英雄的魂は、多くの革命的戦士の規範として称えられ、以降のわが戦旗派の真紅の革命的闘いの核心を形づくったものであった。

しかし、わが同盟の片隅から、地理的にいえば西池袋の「足立商会」なる陰湿きわまりない秘密アジトから、培養されまき散らされてきた非マルクス主義、反レーニン主義の腐敗の因子は、いまやこの五・二九戦士のある部分の革命的魂の中にも浸透し、その革命性を侵食しているのである。

二月二十一日に丸二年間の公判闘争を終えた五・二九被告団において、公判終了時に還付される保釈金の使途が問題とされた。

われわれは、この保釈金がすべて組織的に集められたものであり、それ故に、現在の分派問題の如何に拘らず、戦旗派として闘い、弾圧をうけている一・三〇事件被告の保釈金として用いることを提起した。すでに一・三〇被告は一年に及ぶ長期拘留を闘い抜き、八被告のうち六人の保釈決定を克ちとっていたのであり、一・三〇被告保釈実現は緊急の課題であり、分派の如何に拘らず彼らの保釈実現は共に戦旗派として闘ってきたものにとって、当然果さねばならない責任があったのである。

ところが、この全く正当な提起に対し、足立商会にオルグられた江木、金沢等は、「たしかに金は組織が作った」が、「組織を支えたのは個人」だから、「金は個人にかえすべきだ」等といって、保釈金の個人還付を要求し、一・三〇被告への保釈金の転用を拒否したのである。

これはまるで「雇われ人」の言い草である。

もちろん、こうした犯罪的対応は、江木・金沢等の個人的判断ではなく、かの「足立商会」小番頭の鈴木による演出であり、彼は「解決がつかないから被告に還す」という具合に、保釈金の使途についても、一・三〇被告保釈実現についても、その責任を放棄し、第三者的立場でのあっせんによるリベート取りと足立への結集の策を弄したのである。

まさに「足立商会」はその名に相応しく、五・二九被告に「闘いの日当要求の権利」を与え、かの革命的戦士を民同まがいの「雇われ左翼」に堕落させてしまったのである。そして更に、戦旗派を信じ、一年間の獄中闘争を闘い抜いてきた一・三〇戦士を事もなげに見捨て去ったのである。

そこには、今日の「足立商会」グループの、その腐敗と堕落の行きつく先が、はっきりと示されている。

それはプロレタリア的な革命性や献身性を、小ブルジョア的な自我や「私有財産の意識」に置きかえる、明確な民同的サークル主義への転落であり、「我」と「我」の結合体的集団への党組織の改組である。革命的左翼が自己の闘いに「日当」を要求し、労働者同盟員やシンパ諸氏が、闘いへの連帯として供出した組織的な財産を、個人が代償として持ち去ったという例は、日本階級闘争史上類をみない。

われわれは「五・二九外務省突入戦」の巨大な意義が、このような腐敗によって置き換えられていくことに、大きな悲しみを感じるし、又かかる変質に対し「突入戦士」のある部分が汚染されていることが、本当に残念でならない。